

い大さごちへねんさしきもしましりきやめのせいやかきのはなちや
らさもりくすくによりそつて、みちやたいりおかむやまたさためめし
よわちやるミ御ミ事はしま世のてやちきやらねいしまいしのやにいづ
きやめむいきよくましくるくまし、

大明靖嘉三十三年六月吉日

くすくまの大やくもい まいくさ

世^ナあすたへ 三人 うちまの 大やくもい まごく

こちひらの大やくもい まうし

ふ^フきやう 一人 かつれんの大やくもい まふごう

やらさもりくほくのかくこ又ねたてひかはのみつのかくこは三人たろ
くの大やくもいきまの大やくもいかなくほくの大やくもいいつきやめ
むちよくかたくかくこするへし

讀者もし之と今昔の琉球語とを比較したら 思半はに過ぐることがあ
らう。西暦千六百九年の島津氏の琉球征伐以後琉球語は夥しく近代日本語
の影響を蒙つたから、古代琉球語を研究せうとする人に、この種の金石
文の好個の資料たるべきは勿論である。これらは古格を具ふるだけられ
だけ、解釋するに困難ではあるが、今を去る百九十三年前に尙貞王の勅
を奉じて撰んだ「混効驗集」(琉球の内裏言葉を集めたもので、古代琉球
語の唯一の辞書である)は之を解釋するに多小の便利を興へる。田舎及
び宮古三重山の方言も亦古代琉球語の活きた辞書である。左にこの金石
文の略解を試みよう、

イ、冕嶽修路碑支に「大りうきう國ちうさんわう尙清はそんごんよりこ
のかた二十二代の王の御くらひをつきめしよわちへ天より王の御名を
天つき玉にせごさつつけめまよわちへ」といふとがある。琉球代々の國

王は皆かういふ神號カミナリなるものを有つてゐる、てにつきわうにせは尙清王の神號で、の意を受けた主權者といふ意である。あんし（按司）はちやらと同じ意で爲政者又は西長といふと、もとは貴人の意。百按司慕のをも、ちやら又はものちやなどいひ、妃のをも女メナ按司といふおろい（襲）は支配するの意、にせは治めるの意、かな（加）は崇敬のことばである。オモロには「世かけにせあんしわうい」又は「たそいにせあんしおろい」など、用ゐてゐる。み御ミ事給旨又は詔勅のこと。全体の意味は、琉球國中山王尙清ヲニツキ王ニセ按司オソイ加那志の詔勅。

ロ、國土全安、港灣防禦のために。
ハ、やらざもりは丁櫓新森又は彌良堅森といふ漢字をアテハめしある。那覇山來記によれば昔はりの右の方をやへざもりと云ひ、左の方をや

らざもりと云つて石を崇めてあつたことである。つませは積ませといはさて。みた（ミ）ことは詔勅。たがては奉じて。全体の意味はヤラザモリの外に城壘を築くべしとの詔を奉じて。
ニ、く（ク）のあんじべの國々の大名等。ミバのさぬしべの三番の里之子部、即ち三司官又は三法司で、三人の國務郷の、けら、へ、く、か、は家來赤頭で、位階の名。か（カ）し（シ）もは上下。ち（チ）はなれは地離、即ち属島のこと。琉球語のジマには、二島（一）國（二）故郷（四）田舎（五）領地の五つの意味がある。沖縄島自身も島であるから、昔はこの島に属する島をいひわけて、ハナレ又はデハナレといつてゐた。高離、伊計離等の離（ハナレ）はもと島といふ意味、ち（チ）はと揃うて又を集めて、上は公郷大夫より下は百姓庶民に至るまで、遠近をいさひせ、走せ集まりて、同心協力。

ホ、砲臺を築きて奉りたれば。

古 琉 球

へ、「中山世譜」に、天帝子生三男二女（中略）長女爲君々之始（君者婦女掌神職者之稱也君々者令貴族婦女數十人各掌神職故曰合稱之君々康熙之初議滅其數而今有數職存焉）次女爲祝々之始（祝者掌神職者之稱也祝々者諸郡諸村各々婦女掌職者故合稱之曰祝々至今尙存）とあり。君祝はキミ、ノロといつて、今日でもまだある。「女官御双紙」に「きこゑ大ききかな、此君は三十三君の最上なり昔は女性の極位にて御座し、に大清康熙六丁未年王妃につぐ御位に改め給ふなり」とあり。このやらざまりくすくの落成式の時に之聞得大君、君々も首里から降り給うて列席されて、といふ意。

ト、まうはらひは野原をはらひ清むると、即ち落成式のことめしよわちやはなし給ひたる又は行ひ給ひたる。みせゝるは神歌。このオモロは前に掲げて置いた。全体で、落成式の時のオモロに曰く。

琉球に於ける倭寇の史料

チ、はこのオモロの意味を縮めて書いたので、王命によつて國防の爲にヤラザモリの外の深い海は石を積みあげて、堅固な城壁を築いたからに、いつ迄も軍勢を寄せ集めることが出来るというて、といふ程の意。おほ字句を解釋すると、いしらご、ましらごは字句で同じく石のこと。おりあげわちへ、つみあげわちへは共に積み上げ給うて。みしまよねん、おくのよねんは深い所の意であらう。世そうちりて國を襲ふ所、くにのまでは國の眞平の意か、何れも要害といふ程の意。げらへわちへは造營し給うて。だしきやくぎと堅い釘。ついさしわちへは釘をうつて。あさかかねは固い鐵の意か。とゞめととめをさすこと。リ、祈り給ひければ。ヌ、ともゝすゑは十百年即ち千年。せいくさは軍勢。よせらやいは寄

せ集めて。わうがなしは國王も、みはい（三拜）わがまめしよわちや
るはた祈り遊ばした。

ル、上は諸侯より下は庶民に至るまで相集ひ、頓首百拜して聖壽の無窮
を祈り。

古

ヲ、長老法師等相集りて地鎮祭を施行せる。

リ、沖繩の天か下之間得大君、君々のお威徳が守り給ふ故。

カ、昔より外寇又は海賊の徒の來たりしためしなしといへども

ヨ、國王の思召にて國防のために。

ク、一旦緩急あらば。

レ、爾三司官。

ソ、第一軍は首里城の守備、第二軍は那覇の守備。

ツ、第三軍及び島添大里、知念、佐鋪、下島尻、喜屋武の南沖繩の軍勢

琉

は垣の花のやらざもり城に集合きて。

チ、義勇公に奉ずべしと定め給ふ詔は永久にかはるとなかるべまの意。

ヌ、まよひ國家。てやちきやらの意は明かならせ。ねいしは根石。まい

しは眞石。やには様に。いつは何時。きめめむは迄も。

ナ、世あまたは三司官又は三人の法司。即ち天曹法司、地曹法司、人

曹法司なり。又丑日番、巳日番、酉日番と三人職分を異にするより三

番の御前ともいふ。

下に書いてあるのは三司官の名である。城間の大親雲上眞伊久佐、内

間の大親雲上眞徳、東風平の大親雲上眞牛。大親雲上は領主といふ程

の意。城間、内間、東風平はその姓ではなく、其領邑の名である。

これが姓になつたのは明治十二年以後のことである。例へば蔡温は神

谷の地頭であつた時には神谷親雲上で、末吉の地頭であつた時には末

琉球に於ける倭寇の史料

吉親方で、具志頭の地頭になつた時には具志頭親方であつた。昔は琉球人には董名ワラシナといふ固有の名の外に唐名即ち支那名シナナのり即ち日本名とがあつて所によつて使ひ分けをしてゐた。兩属政策の影響はかういふ所にもあらはれてゐた。うしてその董名をつけるにも一定の規定があつて、平民の名は單に徳とか牛とか伊久佐とかいふ風であるが按司の次男以下士族の名になるさうの上に眞或マキは思オモ又はその下に金をつけて眞徳、眞伊久佐、眞牛といふ風にほる。王子や按司の嫡子になると更にうの下に金カネをつけて眞伊久佐金、眞徳金、眞牛金といふようにする。廢藩置縣前までは平民は今日のやうに新垣太良といはずして太良新垣といふ風にいつたのである。しかしこれが古風の稱へかたで眞津湊の碑文にほる三司官の名は之と同じ様になつてゐる。ラ奉行一人、勝連の大親雲上まふさう。

琉球に於ける倭寇の史料

ム、は裏の方に記されてゐた。これはヤラザモリ城及びこゝに附属してゐる根立寛川の監督には小祿、儀間、金城の三地頭之に任すべしといふのである。これでざつと解釋は済んだ。兎に角琉球の方でと武備を嚴にして今か今かと倭寇を待つてゐた。果せる哉、尚清王がなくなつた翌年、明の嘉靖三十五年の夏、世子尙元シヤウゲン（テダハジメ）が即位して間もなく、支那の浙東を襲うて撃退された日本の邊民と、待ち構へてゐたヤラザモリ城の下に現れた。尙元は忽ちにして之を殲ヤスにした。この時の倭寇の兵力が如何程であつて、如何なる戦鬪が双方の間に行はれたかは知らないが、同じ年に尙元が此時掠へられて來た明人金坤等六人を明國へ送り歸へして明帝に賞せられたと、同四十二年と同四十四年とよ漂浪の明人及び日本人に掠られて來た明人を明國に送り歸したとは明かである。この事は

新井白石が「南島志」にも見られてゐる。

琉球に於ける倭寇はこれ一度ではなかつた。昨年の夏、島居龍藏氏と共に沖繩島の北部を跋渉して歸る途中、中頭郡美里間切石川村のチヌヒンチャの貝塚を發掘してゐた時、同郡勝連の小學訓導平良加那助氏から聞いた話によると、昔石川村の海岸（沖繩本島の東海岸）に倭寇があつて、伊波の按司との間に大激戦があつたが、日本人はりの船に積んであつた金銀財寶を悉く海中に投じて、一人も残らず自殺したといふ口碑があつて、現に石川の村には日本人が投げ棄てた金塊を拾い上げて金持になつた所もあるとのことである。琉球に於て按司と稱してその采地に住したのは三百八十年前のことであるから、この時の倭寇はヤラザモリ城にやつて來たものよりは少し前のことであつたらう。かういふことは獨り沖繩本島に於てあつたのみならず、りの屬島にも屢々あつたといふ形跡があ

る。慶良間島には屢々和寇が來たとの話も聞いた。宮古島の歴史を見るに按司の時代とか殿の時代とかいふのがあるが、殿の時代は恐らく和寇の連中が一時宮古島を占領してゐた時代であらう殿の名に日本流の名のあるのを見てもわかる。

明の正徳四年我が永正六年（西暦千五百九年）に出來た百浦添之欄干之銘に尙眞王時代の政治の特徴十一個條を擧げた第四個條に服裁錦綾器用金銀專、楯刀、劍、弓、矢、以、護、國、之、利、器、此、邦、財、用、武、器、他、州、所、不、及、也、がある。當時沖繩で始めて帶刀を禁して刀劍を取上げたといふことがわかる。これで内乱のおりれは殆んどなくなつたが矢張外敵の來襲に備ふるの必要はあつたのである。爾來和寇の餘波は折り／＼琉球群島の岸を洗つて、アマミキヨ種族の晝寢の夢を敗るとがあつたが、それでも沖繩人の餘り武備の必要を感せずして數十年を過ごした。さうして、慶長十四年（西暦千六

百九年には、琉球王國に致命傷を與へるだけの、大なる倭寇がやつて來た。(三十八年九月五日稿史學界所載)

海 寇

元 王 乙

日本狂奴亂浙東、將軍聽變氣如虹、沙頭列陳燈煙暗、夜半鏢兵海水紅、
筆揮按歌吹落月、鬪罷盛酒飲清風、何日截盡南山竹、細寫當年殺賊功

明 李攀龍

胡兒平、倭奴何不平、和奴利水戰、海壘船爲域、諸軍設騎上、馳射難
縱橫、

明 歸有光

經過兵燹後、焦土遍江村、滿道豺狼跡、誰家鷄犬存、寒風吹白日、鬼
火亂黃昏、何自征科吏、猶然復到門、

琉球文にて記せる最後の金石文

蒙古の突厥碑長安の最敎碑等に就いて熟知せる人も、沖縄島に琉球文にて物せる金石文のたてるとを知らざる可し。こは古來この島を訪づれし何づれの探險家の目にも觸れざりき。

舊王城を北に距ること一里半、盡だに薄暗き浦添の丘上に青白きよ、う、
ざれの墳墓あり。世に珍らしき琉球文の石碑は此處にたてり。この碑文の語る所によれば、向つて左の方は西暦千二百六十年(忽必烈即位の年)所謂爲朝の子と稱する舜天の統について沖縄島の主權者となりエゾノテダ(英祖王)の墳墓にして、右の方は西暦千六百九年島津氏の琉球入の時捕虜となりて江戸へ赴きしテダガスエアンジョソニスヘマサル

王ニセガナシ(尙寧王)の遺體を收めし所あり。而してこの石碑は實に後者の名を干載に傳へんがために建てられたり。

今こゝにこの金石文を解釋するに先ちて、琉球が日支兩國に對する歴史的關係を一瞥するの必要あり。上古の事は暫らくわきて、十四世紀に至り、周廻百里に足らざる沖繩島と分れて中山南山北山の三王國となりぬ。これすなわち沖繩に於ける空前絶後の内争時代にして、正に是れ日本本土に於ける南北兩朝分争の劇なるの秋なりき。この時にあつて明の大祖朱元璋が飄然として使を中山王に遣はすや、三個の小王國は競うて藩を朱明に稱し、子弟並臣を支那に派遣留學せしめたりき。かくて朱明の文明がこの三個の中心点をこほして琉球を支配しつゝある間に、如才なき島津氏は早くもこの南溟の寶庫に着眼して他日之を占領するの準備に忙はかりき。後豐太閤出でて海内を統一するに及んで、この朝鮮

琉球文に記せる後金の石文

半島に用ゐる勢力の餘波は間もなく島津氏の琉球征伐となりて現れぬ。これやがて日本に對する琉球の通商的關係を一變して政治的關係となすの關節あり。而して可憐なる尙寧と捕虜となりて日本へ赴き、狡猾ある薩摩の政治家は思ふが儘にその王なき琉球を經營せぬ。尙寧俘囚となりて日本に在る二年餘、漸く許されて父母の國に歸りしといへども、宛然是れ島津氏の殖民地に身を寄するの一旅客なりき。宜も彼と島津氏の膺懲を受け、一度は捕虜となりて上國せしを恥ぢ、其の不明を謝せんがために故更に代々の國主の墳墓を避けて墓を浦添に構へしなりと傳ふ。れもふに其の墓域にたてる琉球文にて記せる最後の金石文と或意味に於て舊琉球と新琉球とを分つの境界線なるべし。されどこの記憶すべき金石文は刻一刻磨滅しつゝあり。

左にこの金石文の原文と其裏なる漢文とを並記して簡單なる解釋を試

むべし。

ようざれのひのもん (表の文)

らうきう國 てたかすゑあん！たういすへまさる王にせかなしは、う
 らおろいよりしよりにてりあかりめしよわちやと。うらおろいのよう
 ざれば、ゑうのてたの御はかやりよるけにて、おさうせめしよわち
 へ、ちよくきよらくけらゑかけらゑめしよわちへ、大ちよもいかなし
 おやかなしみ御ミつかいめしよわちへ、あさはてたがすゑあん！たそ
 いかあしも御ちよわいめしよわに、おにあればと千代萬代なるまでも
 御名はのこらにしゆるて、御さうせめしよわちへとこのひのもんはた
 て免しよわちやる、この御はかのさうちほうらたそいまきりよりほん
 正月まゑにきよらくからめくへいと、み御み事たかみ申候
 世あすたへ三人 いけくすくの大やくもい よむたもさの大や

くもい ちよくすくの大やくもい ちうふきやう 二人 あ
 はこんの大やくもい こちひらの大やくもい いしふきやう一
 人 たまくすくの大やくもい
 このすみのあさくからはほるへし
 萬曆四十八年かのへさる八月吉日
 これ三百年以前の琉球の内裏言葉なり。讀者もし之を現今の琉球語と比
 較せば、思ひ半ばに過ぐるものあらむ。

極樂山之碑文 (裏の文)

此山者琉球國四代之世主 英祖之天子之開基也久歷年之故風雨荒廢之
 餘石良工奉 尙寧賢王之勅而修造之不日成就矣然者 維時萬曆四十八
 年庚申擇取秋時正日而 賢王之御先祖一氏一族干此山移之矣父子兄弟
 共同居矣仰彌高鑽彌堅澁不繙磨不磷者夫極樂山之風景也爲今後人知刻

石記焉

三司官 池城鹽太郎 讀谷山太郎 豐美城思符多

大奉行 阿波根真界 東風平思次郎 木奉行 玉城郡主思偏

萬曆四十八年庚申秋時正日 福源山天王寺 藍玉更 記焉

こは前文の漢譯なり。

譯解

イ (譯) 琉球國尙寧王こ

(解) てだがまゑんしたういばゑまゑる王にせかかしは尙寧王の神
號也。てだは日輪、すゑは子孫、あんまは按司、すへまゑるは子
孫繁昌、たういと襲即ち治者、にせはおういと同意、がなしは崇
敬の詞。オモロには「世かけにせあんじおそい」、又は「たそいに
せあんじおそい」など用ゐたり。

古琉球

琉球文に於て最る後念の石文

リ、(譯) 浦添より出て、王位に登り給ひしが故に。

(解) うらた、いは地名。し、よりは首里。てり、あがりは照り上り即ち
ち王位に登るの意にして、てだ(日輪)の縁にて言へるなり。尙寧
王は浦添の領主なりしが、尙永王子なきを以て其後を襲ぎし也。
父を尙懿といひ、祖父を尙弘業といふ、弘業の父尙維衡は今の尙
家の大祖なる尙圓王の子尙眞の長子なり

ハ、(譯) 浦添のようざれり。

(解) ようざれは極樂山ともいふ。琉球語よ、うは世又は世界、ざれは
しんごとしてしづまりかへる状態をいふ。オモロに「朝ざれがしよ
れば」「夕ざれかよれば」といふ句あり、この時のこれは無風の
とをいふ。ようざれかる音と吾人の琉球的耳には一種異様に響く
ものあり。兎に角寂寥なる墓地にはふさはしき名稱なり。佐敷な

る尙巴志の一族の墓地も「佐敷ようざれ」の稱あればようざれの固有
名詞に非ずして普通名詞なることは明かなり。思ふにこは古代琉語
の墓といふ言葉なるべし。

ニ、(譯)英祖王の陵なればとて。

(解)てだはもと日輪のこごなれども、轉じては日子即ち王の意と
る。日本語の日子即ち彦と比較して考ふべし。英祖即ちエゾノイ
クサモイはもと浦添の豪族にして舜天の子孫の勢望漸く衰ふるに
及んで代つて沖繩に君臨せしものなり。オモロの詩人は彼れを謳
歌して

ゑすのいくさもい月のかずあすびたち

ともゝとわかてだはやせ

いちへきいくさもい

琉 球

琉球文に記せる最るの金石文

なつはしげちもろ

冬はおざけもろ

といへり。歌球集にも

ゑぞのいくさもい夏過ぎて冬や御酒もてよらて遊びめまやうち

といふ歌あり

ホ、(譯)おぼしめえて

へ、(譯)堅固に且つ奇麗に修理させ給ひて(こゝに)

(解)げらゑは造營なり。オモロに十尋殿げらいて、八尋殿げらいて
とあり。げらゑかけらゑは作り、作りと譯すべく、念に念を入れ
て作るの意なり。げらいは食物を調進する意も用ゐることあ
り。又上品なる言葉をげらい言葉といふあり

ト、(譯)曾祖父(の魂魄遺骸)を迎へ奉りて。

(解) 大ちよもいかなしは祖父の意あり。按司家にては今日なほわば
ち、おんち、やかしといふ。おやがなしは親の義即父君。ミおみ、つか
ひは御使なり。めし、よわちへは奉りてあり。

古

チ、(譯) 後には尙寧王も成らせおはしまさむ。

琉

リ、(譯) 然ればこそ芳名は千代萬代に傳はらめとねほしめして、この石
碑は建てさせ玉へる。

球

ス、(譯) この陵の掃除は盆正月前に浦添間切より奇麗に爲すべしとの詔
勅を承はりぬ。

ル、(譯) 三司官。

(解) 明の嘉靖元年の眞珠湊碑には「このほみのことは〇三人の世あ
またべ」と記せり。以後の碑文には「世あすたべ三人」と記せり又
三ばんのたまへといふともあり。

琉球文に記せる最後の金石文

琉球の金石文は悉く砂石に刻まれたるが故に、時の流れと共に漸次摩
滅して、今日その原形を具備するもの至つて少しといへども、幸に琉球
國中碑文記なる書ありて、碑文は勿論城中及び諸寺院に掲げられたる額
聯牌等の文句を網羅し尽せり。中に琉球文にて起せる金石文十一を收め
たり。最初のもものは西暦千五百一年(文龜元年九月)尙家代々の墓域内
に建てられたるものにして、右に掲げたるようざれのひのもんを以て最
終とす。以後の碑文は總べて漢文にて記され、又この種の碑文を見るこ
能はま。時としては漢文にて記せる石碑の裏に候文の譯を添へたるあり
名護の三府龍脈碑の如きこれあり。

前にも述べし如く琉球人は十四世紀の初つ方、一方に於ては支那文明
を輸入して漸く漢文を用ゐ、他方に於ては日本文明を吸収して僅に和文
を物せしが、また自國文を使用はることを怠らざりき。按ずるに彼等が和

古 琉 球

文及び漢文は熟達せざりし時代に於ては、公文にも記録にも消息にも、大方琉球文を用ゐたりしからんも、琉球の事情の治者の興亡の頻繁なりしに加へて、島津氏の琉球入りありしたために、尙圓王以前（四百三十五年前）の文書記録は皆失はれて今日傳ふるものなし。彼等は自國語を寫すべき自國の文字を有せざりしも、自國語を以て萬事を記さむとするの熱心と好奇心とは遂に彼等を騙りて日本の平假名を採用するに至らしめき。彼等は不完全なる日本の文字をかりて音韻の豊富なる自國語を寫すにあたつて多くの困難に逢遇せしが、おきや、か、も、い、かなし、（尙眞王）の時（西暦千五百三十二年）之を以て琉球の萬葉ともいふべきオモロを寫し出し、進んで自國語の金石文を刻みぬ。彼等は實に「言葉のさきはふ國」と誇りし大和民族の爲きざりし所のものを成しぬ。これはた琉球のための特筆大書すべきことにあらずや。

琉球文に記せる最後の金石文

されど僅に發生を來りて琉球文學の萌芽は西暦千六百九年の政治的津浪によりてもろくも傷きぬ。爾來琉球語は夥しく日本語の影響を蒙りたるが故に、慶長以前の琉球語を研究せむとする人にこの種の金石文及びおもろ、うたかべの詞、御拜つゝ、おもいくわいにや等が好資料たるべきは勿論なり。これらは古格を備ふるだけりれだけ解釋するに困難なりといへども、今を去る五百九十三年前に尙眞王の勅を奉じて撰びたる混効驗集は之を解釋するに多少の便利を興ふべし。（三十七年稿考古界所載）

出 都

程 順 則

金勒絲輻白玉鞍天書高棒出長安中原錦繡山川麗江北江南立馬行

元祿中清の北京にいうて國にかへりなんこせし時よみ侍る

池 城 親 方

たれも見よこれなまことのからにしき北の都を立出づる袖

官生騷動に就いて

三四

官生騷動は今から百年前に、官生の一件で久米村人が騒ぎ出したストライキであつて、近代琉球史上の一大事件である。すなはち琉球近代の名主尙温の時代に従来久米村の方から北京の國子監に出してゐた官生四人の中から二人だけは首里の方から出さうとした時に、久米村人がいたく反對を稱へて遂に大騒ぎをやらした事件である。今この事件を語るに先ちて少しく官生の歴史を述べよう。

琉球が始めて支那に通したのは、今から五百三十年前即ち明の洪武の五年である。當時琉球で三山が鼎立して相戦つてゐたが、時の中山王察度が明國に通するに及んで、他の二王も亦争うて臣を朱明に稱し二十

官生騷動に就いて

年の後（洪武二十五年）中山南山の二王は始ちて王子及び陪臣の子を明國に遣して太學に入れた。これがすなはち官生の初である。官生とはやがて今日の官費留學生のやうな者である。官生の歴史は後に引用する久米村例寄帳中の文書を見てもわかるが、尙細しくは清國政府で編纂した欽定四庫全書中の琉球入太學始末に出してゐる。（國子監志にも細しく出てゐる）これは清人張潮が物したので康熙二十三年（二百二十二年）尙貞王の時に、官生梁成楫等が北京に赴いて監に入るの始末を記したのであるが、ついでに明の洪武の頃から永樂宣徳成化を経て當時に至る官生の歴史を叙述したのである。（官生の學資官生の撰拔試験官生の待遇などのとは久米村例寄帳二集に出てゐる）これらの資料を一瞥したら、最初の官生の成績が餘程悪かつたといふことがわかる。實に遊逸學に馴れない貴公子の連中は到底長期の修學にたわなひで皆悉く失敗に畢つた。

三五

古 琉 球

こで今を去る三百八十年前明の嘉靖の五年尚眞王が中央集權を斷行した頃、首里政府の斷然王子及陪臣の官生を廢して明の洪武の二十六年に琉球に歸化した閩人の子孫なる久米村人の中から官生を出せよとした。彼等は琉球に歸化してまだ百二十八年にかならなかつたから、その支那に留學するに及んで、恰も殖民地人がその本國に遊ぶ心地が去たのであらう。成程嘉靖五年に南京へいつた久米村最初の官生蔡延等四人は同十年に國子監を卒業して歸り、同十七年にいつた官生梁玄等四人も同二十三年に國子監を卒業して歸つた。何れも七年間の修業にたえたのだ。爾來琉球の教權は全く久米村人の掌中に歸した。併し日月の經つにつれて久米村人も段々琉球化し、その本國宋明の滅亡後は殆ど在來の島人と區別し難きに至つた。康熙乾隆の頃に至つて久米村の學風が一變してゐた。それは其志頭親方蔡温が年老いて三司官を辞さうとした時訓令を發して漢

官 生 騷 動 に 就 いて

文を熟習せむとを久米村人に諭戒したのである。又當時官生の成績が悪くなつてゐたとも張潮氏がその琉球人、太學始末の題辭の中に、
 ……吾竊爲彼國惜者、則以讀書未久、遂即講歸假使其更歷年所、學爲別舉文字簡練、揣摩與國子諸先生同、與干寶興之典、或得甲科第之殊榮、然後歸國、于以照耀隣封、翔翔島嶼、所得不更多乎、而惜乎其智之未乎此也。
 と歎じたのであつた。講歸とは實に面白い。彼等の多くは第一着の困難に早くもがつかり去て其事を廢したのである。加之の急性なる戀郷病は遂に彼等を驅つて東海の樂園より飛び去らしめた。而も彼等の歸るを講せしや、その口實とする所或は老母門に待つといひ或は未だ室あらずといひ或は中華の文物を知る、更に淺からず願くは去つてかの愚昧なる國人を救えんといふとであつた。要するに當時の官生が徐ろにその大成を期せよして遂にその成功を急いだのは惜しみてはなほ餘りあることであ

る。しかし言語風俗習慣の異なる所に始めて學問しに行つた時の歴史は、何づれの國でもこの通りであつたらう。かくの如く國子監で苦しんだ官生の成績は餘り好くながつたが、自費又は半官費で福建に學んだ連中の成績は實にさか／＼かつた。程順則や蔡温は後者に屬すべき人で、久米村の運命は實にかういふ人々によつて繋ぎとめられたのである。そして蔡温程順則の時代と久米村の全盛時代であつて又琉球の全盛時代であつた。語を換へていへば、この時代の琉球は久米村の琉であつた。蔡温の自叙傳を繙くと、如何に彼が活學問をしたかといふことがわかる。彼は萬卷の書を讀んでも研究法がよくいゝと單に糟粕を嘗めるばかりで正味はさても味ふとが出来ぬといふやうなことを言つてゐる。成程彼は北京に七八年もゐて紙魚となつて歸つた官生といふ打つて變つて、福建に二年ばかりゐて活學者となつて歸つた。政治的天才なる彼は格外か

琉 球

官 生 騷 動 に 就 いて

ら拔擢されて四十七歳で三司官となつた。久米村の蔡温は沖繩の蔡温にあつたのである。これやがて教權と政權とが一致したのである。門閥を重んずる首里人士の間には飽くまでも彼れの政治に反對するものがあつたか、彼は悉く之を鎮壓して向象賢の政見を布衍して思ふ存分に沖繩を經營した。諸君もし彼れの手になりし教條や獨物語などを繙かば、その注意の永遠に涉り、其政略の心切ある眞まは 第一の政治家として民衆を誘導し教訓し南溟の小王國を可憐なる情態から救ひ出したといふことを知るであらう。

蔡温が三司官を辞して五年の後（乾隆廿三年）久米村の方から梁允治・蔡世昌・鄭孝徳金型の四人が官生となつて北京へ赴かうとした時、例によつて、三司官以下百官が彼等の爲に餞別の宴を張つたことがあつたが、宴酣ある比、蔡温翁の梁鄭金の三官生に向つては只た身體を大事にして成

業して歸へるようにと祝し、その親類なる蔡世昌に向つては君は北京に往つたら、單に詩文にのみ耽らるゝで。専ら治國平天下の事を研究して來るようにと諭した。側で聽いてゐた連中は蔡温は妙な事を言ふものとひそかに言つてゐたが、入監間もかく金聖梁允治の二人が病死したとの報知を得て何れも蔡温の明に服さないものは無かつたとの事である。五年經つて乾隆二十七年となつた。鄭孝德（宜壽次里主 蔡世昌（高良里主）の二人は琉球官生あつて以來の好成績で國子監を卒業して歸つた。中に就いて元氣な蔡世昌は老政治家の注文通り政治學を修めし歸つた。惜しい哉、老政治家は前の歳にこの世を辭して彼れの出世を見ると出來なんだ。口碑によれば久米村人は大に喜んでこの官生を迎へたが案外その詩文の拙なるを見て俄に失望し、彼は官生では無い（ウツシ）置業であるといつて彼れを輕蔑した。蔡世昌は彼等は畢竟吾が本領を知らぬ輩で

あるとは思つたが、餘りの悔辱に絶たかねて三年の間久茂地の東禪寺に引込んで一所懸命に詩文を勉強した。さて再び世の中に出て見ると、詩文に於ても誰れ一人として彼れの右に出づる者がゐないのを見て、彼は愈々自信心を増して遂に第二の蔡温にならうと決心し、彼れを容るゝの出來なかつた久米村人と交を絶つて首里人士と交り、徐ろに時期の到るを俟つてゐた。これやがて官生騷動の動機である。

星移り物變り、乾隆五十九年とあつた。敦厚純良なる尙穆王は當年十二歳の愛孫を遣して此世を去つた。この寧馨兒こそは琉球近代の名主尙温である。即位の四年（嘉慶二年）蔡世昌を以て國師と爲した。三十六年前の官生蔡世昌（高良里主）は遂に國師蔡世昌（高島親方）となつた。前の年王は蔡世昌の建議により、首里に公向學校を起す事に就いて久米村の諸大夫に咨問をした。これとりもかほさず久米村の教權を奪ふ前提

である。

嘉慶三年の正月八日に首里王府は久米村に向つて左の布達を發した。
一御鎖之側立津親雲上より長史御用に付き具志堅里親雲上登城被仰渡候
者官生兩人は首里より相交被差遣候久米村方支有之候は、何分と可申
上旨被仰渡候事

一右付大夫衆並都事座敷迄明朝指にて明倫堂江被罷出候段觸差送候事

嘉慶三年戊午正月八日

久米村人に取つては寢耳に水でゐつた。彼等は急に答ふべき術を知らな
かつた。四ヶ月経つても尙答ふ可きを知らなかつた。これ彼等に取つて
死活問題であつたからである。其間に首里の方では着々その計畫を實行
しつゝあつた。四月廿三日首里王府は學校師匠並三平等學校師匠を置く
に就いて久米村の方に講談師匠の撰拔試験を行つて申出すよう言付け

古 琉 球

官生騷動に就いて

六月にはりれ、講談師匠の任命をしてゐる。愈々官生を出す準備に取
りかゝつたのである。久米村の方では熟議を重ねた上、七月の朔日に始
めて諸大夫吟味書なるものを草して官生一件に就いて不服を訴へた。左
にの全文を掲げよう。

一官生兩人首里より被差遣候處障有之候は、何分と可申上旨被仰付候以
之申談無者官生兩人相交御差遣候は、久米村人職業無最通到以後御
支成行も可有御座哉依之申上候者往古三山差分

尙思紹御世代迄各所より王之子弟官之子弟共爲御差遣御事候處御當世代
先王尙眞様御代成化年間よりは久米村人被差遣御例被迎定
尙敬様

尙穆様御代至迄其通被迎付莫加難有次第奉存候然者久米村人之儀
察度王世代三十六姓御申請始而禮樂を定禮法相備文教相廣候付而

太祖皇帝降より禮義之國と被稱候由御世譜相見得居依御扶持等被成下厚
蒙御高恩冥加難有永々御素立師匠被召立幼少之時より唐音稽古渡唐勤
學被迎付専唐取合文書被召校唐通融御使者無斷絶御冠船毎盡紛骨御奉
公無間遠相勤今に四百年餘相成事御座候右通職業差分被迎定置御事御
座候處にて官生首里より被差遣候筋相成候得者久米村人之儀以後は忘
却之体成行極に可及迷惑哉と存當候然者

尙眞様御世代より久米村人江被迎付候段は御世譜並寶案傳信錄國志略等
にも相見得申候且又去成寅年官生師匠國子監之助教之住藩相中人琉球
入學見聞録組見往古三山相別

尙思紹御世代迄各王之子弟又は成化年間よりは三十六姓之子弟被差遣代
々之官生三十六姓よりの世代付間柄等委細相記國子監御格護之由相見
得申候然處首里より被迎付候者諸書並國子監規模相替久米村人職業無

最通管候得者老少共かみと驚入居申候間何卒以先例之通被迎付候は、御
支成儀も有御座間敷哉と奉存候此旨宜敷様御取成被下儀奉願候以上
附官主之儀久米村永代の事よて都通事以上秀才迄吟味仕らせ候處別
紙の通出有之候行取添差上申候

七月朔日

但高島親方屋部親方には書付支之段又は國子監規模等有之候儀御同
意難成由にて加判除

蔡世昌鄭孝徳の二人は之に賛成しなかつたのである。都通事以下秀才の
意見書は右と大同小異であるが、煩を厭はず左に掲げて見よう。

一官生四人の内二人は首里より被御差遣候處差支候儀も可有之哉吟味を
以て何分可申上旨諸大夫江仰付候体私共江も吟味被申付依之存寄之趣
左に申上候覺

一御當國の儀大明洪武年間

先王察度御代初而中國に進貢被遊候處海外之小國にて教化不盛禮典不完に付閩人三十六姓拜領被成下候右漸々風俗變改御政法禮式等品能相成太祖皇帝様禮儀の邦と被遊御褒稱由御座候先王様御喜悅不斜厚御撫育專大唐御取合之事而已被召授師匠等召立諸藝稽古方被仰付當分迄四百餘年

古 琉 球

天朝御取合無間違相辨來申候就中官生之儀
尙眞様御代より
尙穆様御代迄當村に限被仰付誠以冥加至極難有次第奉存候尤三十六姓之後裔御差遣被成候段諸書にも相見得唐官人衆委細御存知之上可有御座候得者一旦御舊例相替首里衆相交接被御差遣候は、欲聞之程難計得御支候儀も致出來候半乍恐如何と奉存候當年封王御願被仰上來申年に之冠

官生騷動に就いて

船御渡來之筈にて唐人御取合之儀當村講込之事にて老若共勵忠勤御一世御一度之御大禮隨分品能致辨達度願意を以て夫々稽古方致出精誠以大切成折柄候處首里衆相交接官生被御差遣候段承當と驚入氣力相衰諸稽古方不進之体にも成行心配之事御座候

一御當國御奉公方之儀從跡々首里那覇久米村各役職御差別被仰定當村之儀專唐向之勤向而已被仰付置候處至此節大切之御奉公不圖被爲御引候は、後年諸藝おのづから相劣所中極々可及衰微儀は勿論

天朝御取合差支可申儀も可有御座哉乍恐奉推察候

右通官生一件に付段々致吟味候處前文申上通御支可申儀も致出來候半其上當村之儀は專唐向之勤而已被召授置候處至此節大切成奉行爲御引候は、所中極々迷惑之次第にも可相成哉と奉存候條何卒跡々より有來候通官生四人共當村に被仰付度奉存候此旨被仰上可被下儀奉願候以上

午七月

都通事秀才迄

三六

古 琉 球

久米村の方では四百年來有し來つた特權を奪はれるとであるから、且つ驚き且つ憤り、此處に集會被處に集會、會議に日も是れ足りないといふ有様であつた。かくて双方の間に幾回かの交渉があつたが、容易に落着しなかつた。七月九日に至つて、三司官は久米村の想役長史ウキヤクチャクシに命令を發して官生二人は愈々首里の方から出すことに定めたから、心得違のないやうにと諭した。その文はかうである、

一封王使御歸朝以後官生四人久米村より彼差渡内二人は首里より被差渡候ても差支候儀の無之哉の旨吟味申渡候處右通にては久米村方差支相成候儀共有之就中冠船御渡來前講稽言方折角相勵候處右之段承何れも不安存不進之体も成候間首里より被差渡候儀は被召止度旨久米村中より申出之書引取添被申出趣令承達候間官生之儀題目遠國御教化之爲

官 生 騷 動 に 就 いて

國子監に被召入段有難御教育被仰付御事候得者久米村不限御城下貴族諸臣士よりも人品器量を撰被差渡學問並御仕置筋等隨分心懸習受候はば學問相廣御政務之御補助にも可相成儀と厚思召を以首里より被差交事に候何々後年至久米村方受持久勤方に召替儀にては無之尤久米村よりも兩人被差渡事候得は諸藝等之支相成儀も有之間敷事候條右之旨趣具に得其意諸大夫以下之面々えも得と申聞聊心得違之儀共無之稽古事等是迄之通入精冠船方御用向宜相辨候筋精々心懸候様委曲可申渡者也

七月九日

三司官

惣役長史

立派な理由である。首里政府はりの素志を貫徹した。恐らく久米村の方から第二の藝温ウキノの出るのを禦いで、首里の方から第二の藝温を出す準備をしたのであらう。山來政治ヤマキ政治に熱中する人民は政權ウキノさへ握れば教權ウキノの如

三六

きは何人の手に委ねても差支がはいと考へる傾きがある。數百年間政權を握つてゐる所の首里人士も、教權は全く久米村人に委ねて願ひをかつたのである。所が四五十年前に於ける蔡温の活動を目撃するに及んで始めて最賢き政治は政權と教權とを併せ握るにありといふと、氣が付いて遂にこの度の問題を惹起すに至つた。これ首里人士の政治思想の一進歩である。まかしながら久米村人に取つては大々的打撃であつた。この大打撃を受けた久米村人は遂にストライキを起した。手はじめとして蔡世昌鄭孝徳の二人は久米村を賣つた者であるから、二人に制裁を喰らはせるとなつて、その宅に石を投入れるやら、糞を引つかけるやら投書をやるやらで、大なる迫害を加へた。さうして鹿兒島から派遣されてゐた奉行の旅館に投書をして、此度の事件に就いて訴へる所があつた。平等所は長史を呼出して注意を興へた。

覺

長史一人

一右御用之儀有之候間當座江可被罷出候御急用にて候間油斷被致間敷候以上

平等所

八月十二日 久米村筆者

一右に付長史長嶺通事親雲上早速平等所江罷登候處官生兩人首里より被仰付候砌御相談之儀は高島屋部親方久米村惣中と同意無御座候付其後依彼宅へ礫を投入又は糞共相懸或は落書差入候付諸大夫衆相拵以後右之仕形無之様嚴重に可申渡候若重てケ様之仕形於有之は重々御科被仰付候段被仰付依之早速罷下觸差通同十三日惣役長史始諸大夫衆相拵右之旨趣都通以下秀才迄堅申渡候事

久米村人はおほも暴動をついた。愈々主動者の控留といふ段になる。

覺

一冠船付考方中取上原親雲上、右同松長里親雲上、講談師匠小渡里親雲上、

右者御用係に付牢舎被仰付候間此段致問合候以上

八月十四日

平等所

長史

琉球

かういふ具合に控留が始まつた。それでも暴動はやまかい。そこで十六日には漏刻御番の小渡里親雲上が控留され、二十九日には漏刻御番小渡里親雲上考方筆者新垣通事親雲上が控留された。さうして九月の十五日には長史の長嶺通事親雲上當山親雲上が控留された。口碑によれば平等所では随分残酷な拷問を爲したとのことである。當

官生騒動に就いて

時獄にゐた久米村人はお互同志はわざと支那語で話し、外の連中も亦平良市場の高い所に登つて支那語で獄中の人に通信をえたことである。

この騒動と袖領株の流罪や、その他連中の寺入等によつて漸く鎮壓された。當時久米村が一時に寂しくなつてゐたこと、この事件の起らない前に官命を帯びて支那に往つた王丕烈（後の國場親方）が支那から歸つた日、親戚朋友が多く見えないのを見て、涙を流して大難に死せずんば後必老幸福ありで吾れは獨り立身をするに相違おいと歎じたといふ話でもわかる。この時久米島に流された張本人に松長里親雲上金文和といふ學者がゐたが、三鳥論を著し、辭を烏雀懲の三鳥に假りて時の三司官の失政を諷示した。原文は漢文であるが、候文に譯したのもある。一讀すべき書である。

このストライキが落着いた年の九月、尙温は林家槐に命じて國學訓飭

士子諭を草せしめて士子に示した。字句内容とも中々立派なもので、余
なほ縣立中學校に保存されてゐる。煩を厭はず全文を掲げらるゝにする。

國學訓飭士子諭

稽古之學校天子曰辟雍諸侯曰泮宮皆所以興行教化作育人材典至渥也今
予國都自古以來未建泮宮典尚闕如應建國學興教化育人材以臻美備然現
今國財未裕不遂興建之志故舊官署權爲國學著派按司向國藩紫巾官向元
佐充爲國學奉行並令當座官金世裕麻克昌借爲中取役督理學務既又簡派
紫金大夫蔡世昌以爲學師公同議立學規董勸諸生務期風教修明賢才蔚起
庶幾棧樸作人之意今蔡世昌不幸病故命中議大夫林家槐充補學師特製訓
言警飭諸生其各諦聽蓋古之學者先立品行次及諸藝爾諸生幼聞庭訓長列
鄉學朝夕誦讀寧無講究必也躬修實踐砥礪廉隅敦孝順以事親乘忠貞以立
志窮經考業勿雜荒誕之談取友親師務化橋盈之氣常防蕩軼毋事逸遊苟行

止有虧雖讀書何益若夫宅心弗淑行己多愆或悲語流言惑聽官長或營私獻
嬖出入權門或依附勢豪欺孤凌弱或招呼朋類樹黨爲援又以當悲當恨之行
反爲得計而不公不道之事罔顧害人乃若此人名教不容鄉黨勿齒縱倖脫網
朴濫竊章縫返之於衷寧無愧乎種種弊端深可痛恨故返復惓々特宜訓言使
爾等共體予心恪遵明訓一切痛加改省爭自濯磨勤學積行逢時得志不恃爾
身有榮即爾祖先亦增光寵矣若乃玩愒勿傲暴棄自甘則是爾等冥頑無知終
不能率教也既負栽培復于咎戾國法具在予亦不能爲爾等寬矣自茲以往無
論名門與寒陋如有積行勸學爲國獻者則雖布衣子弟我將舉而用之如或敗
檢踰閑不遵月訓者則雖貴族子孫我將退而去焉凡各學奉行師長並宜傳集
諸生多方董勸以副予懷否則職業勿修咎亦難道勿謂予言之不預也爾多士
尙謹聽之哉

嘉慶三年戊午九月殺旦訓飭士子諭

實に堂々たるものである。特に其結末に茲より以往名門と寒陋とを論ずる無く如し行を積み學を勤め國の爲に猷を宣ぶる者台らば布衣の子弟と雖我將に擧て之を用ゐん如し檢を敗り閑を踰む者あらば貴族の子孫といへど。我將に退けて之を去らむ。といふ所などは尙温が積年の餘弊を改革せんとしたとがわかる。この時に當つて國師蔡世昌の勢は實にすばらしいものであつた。

二年を経て嘉慶五年即ち尙温王の冠船が來た年、愈々國學奉行が置かれた。明る年の二月三日に尙温は親ら海邦養秀の四字を大書して沖繩の教育に對する理想を表ひした。當時官生四人に官生供（副官生）四人をつけて派遣するといふ議があつたと見えて、四月六日には久米村の方から官生供四人の内二人は久米村から出して貰ひたいといふ願書が出てゐる。首里の方では久米村の人心を和ぐる手段として之を許した。十月の

古 琉 球

官 生 騷 動 に 就 いて

四日に國學が落成し、廿八日には御評定所の方から學生募集の廣告が出た。これ迄なほち舊琉球王國の首府に學校が出來た初である。今を去る百六年前の事である。そこで、四百餘年間、久米村人の掌中にあつた、教權は漸く首里王府の手に移つた。翌年愈々官生向尋思向世德鄭邦孝崇喬副官生向善榮毛長芳蔡戴聖蔡思恭の八人を北京へ派遣した。

この時に當つて國師蔡世昌は第二の蔡温よめるべき筈であるのに、惜しい哉彼は一個の久米村人であつて、而も蔡温の如き偉大なる人物ではなかつた。おまけに彼れの弟子ある尙温王は其事業の完成を見ずして、十九歳を一期として俄に墳墓に入つた。（毒殺されたといふ口碑もある）久米村人に見棄てられた蔡世昌の後漸く人に利用されたといふことを知つてはかなき最後を遂げたことである。

尙温及び蔡世昌が教育を基礎とえて沖繩を經營せうとした考へは實に

立派な考へであつたが、時勢の闇流の瞬く間に二人をさらつて了つた。實に尙温の短い生涯の花々しかつたのは燈火の將に消えようとする一刹那一入の光輝を放つま譬へるゝが出来る。彼れ死して沖繩は俄に闇黒となつた。世子尙成三歳にして立つたが、僅數ヶ月にして死し尙温の血統は全く絶れた。

古 琉 球

副使李鼎元かその使琉球記中に尙温土の風采に就いて言つてゐる所がある。少頃世孫來年十七厚重簡默儀度雍容白哲而豐頤有福相、口に訥にして行に敏ある底の人格を偲べしめる。

沖繩の教育史を編む人之此霸氣ある若い王の名を記憶す可きである。今や彼れ没えて百五年、彼れの事業全く忘れられ彼れの名亦將に忘れられようとしてゐる。而も海邦養秀の類は今なほ中學校の玄關に懸つてゐて、彼れが沖繩の教育に對する希望を語つてゐる。(四十年四月二日稿) 琉球新報所載

俚諺によりて沖繩の社會を説明されたる

俚諺は一種の詩である。社會の意識を餘程巧に言ひ表はした言葉である。社會の群衆は或事に關して、知らず識らずの間に一種の考へを懐いて來るものである。それを言ひ表はさうとして久しく言ひ表はせないでゐる。そこへ群衆の中に、誰か一人詩人的性格を有する者があつて、群衆に代つてそれを巧に言ひ表はし、群衆をしてうた言はしむるゝがある。かういふやうに言ひ表はされた言葉がすなはち俚諺である。これは一種のインスピレーションなしに作れるものでない。よしやごこの才人が勝手に作ることもあるとしても、それでは一人や二人はうなづくかも知らないが、社會全体は容易にうなづかない。それと兎に角俚諺は

民族心理研究の好資料である。沖縄の俚諺の如き一種の特色を帯びた俚諺も亦りの好資料たるを失えない。彼の人口に膾炙する。

シユインチヨ、スリーズリ、
ナ、ハンチヨ、ナ、ハイバイ、
クニンダンチヨ、クンタルバトシエ。

の如きは、いつ頃誰が言ひ出したかは知れぬが、實に能く往時よける首里、那覇、久米、三團體の性質を批評したものと思ふ。

成程この三團體の性質の道を歩く時に能くあらはれてゐる。首里人は一緒に（スリーズリ）歩く、久米村人は推し合つて（クンタルバトシエ）で歩く、那覇人は離れ々で（ナ、ハイバイ）で歩く。そしてこの性質が萬事に現はれてゐる。今もし社會學者があつて、この三社會を研究するとしても、これ以上の結論を與へるとは出来ない。ことに

古 琉 球

俚諺に於ての沖縄の社會

この俚諺はアリタレシヨン（頭韻法）になつてゐて、誠に記憶易い。試にこの三社會を歴史的に觀察してみると、今日の首里が出来上つたのは今から三百七八十年前で、尙眞王（オギヤカモイ）が三山の諸按司に首里在佐を命じた頃である。もともと性質の異なつた三種の民を打つて一丸となすのであつたから、最初の間は容易に調和すべくも見えなかつたが、首里王府の社會化の宜しきを得たと外來の勢力の壓迫によつて、尙家を中心として歩調を合せて進むの必要を感じ、いつしか政治的人民とありつたのである。此政治的意識は、遺傳的に今日に傳はり、昔の城下は荒れ果て、首里人はまたこのスリーズリの社會性を失はぬで常に縣下を一纏めにせうとする傾向を有つてゐる。

那覇の出来具合は首里のとは全く別物である。那覇はもと此處から一人彼處からも一人といふ鹽梅式に、種々雑多の人間の寄り合つて出来

琉 球 古

た所で、何等中心のあるでもない。非政治的の人民の寄合所として今日に至つた。孫子が雜民の集まる所は其民輕くして用ふ可からざるをいつた言葉は假りて以て古今の那覇人を形容する事が出来る。誰れが何と言つても那覇人は今かハイハイである。那覇人が各字といふ狭い考へを棄て、那覇全體といふを意識するまでは可なり長い年月を要するであらう。さういふ域に到達せぬ内は、那覇人は到底縣の有力なる分子にはなれないのである。

久米は今日は殆んど那覇に同化したもの、もと那覇とは著しく性質の異なつた所である。久米はもと明國の殖民地であつた。この殖民地人は五百六十年前始めてこの地に來た頃には、まだ一個の團體を形成してゐなかつたが、一滴の油が水中に這入つて丸くなるやうに、その群の一體を別社會の真中に這入つて、急に一種の社會性を發生し、相異なる社

個社の繩沖るたれさ明説てりよに諺俚

會の裏に、截然特立の一社會を形成して、直ちに一機關に充てられ、一制度に充てられた。しかも、彼等の状態は久しくクンクルパーシエーであつた。なほはち歩調は合はないけれども、兎に角推し合つて進んでゐた。それでもハイハイよりはまゝであつた。

つらく、縣下の現状を視るよ、まだハイハイ（離れく）の状態である。何れ近き將來にクンクルパーシエー（推し合ひ）の状態を経てスリズリ（歩調の揃ふ）状態に進むに相違ない。その時に至つて本縣は漸く他府縣と歩調を合せて進むとが出來るのである。如何なる社會も一足飛に安全なる社會になるとは出來ない。もまさういふとがあつたら却つて不健全である。兎に角經過すべき所は經過せなければならぬ。

（四十二年二月一日稿、沖繩毎日新聞所載）

古人の語や過不及や無いらぬ（沖繩の俚諺）

沖繩に固有の文字ありしや

三四

沖繩に固有の文字があつたかどうか。これ少しく講究すべき問題である。遺老説傳を讀んで見ると、

大荒之際未有文字時天人帶占書（時双紙）降下此世教之於民其文字數有一百餘字後人遇要日修造居室天人見之召占者曰今日大凶令其人修室蓋屋何故答曰彼人不來問亦如之何天人怒曰彼人愚而不知汝何不往告耶遂奪其書裂破而上天今所存者過十千十二支而已

といふとがある。新井白石が南島志の第七章文藝の所には沖繩文字のことに就いて、

國無文字俗相傳云昔有天降而教人以文字其體如篆然（註、出袋中所錄

云昔有人降而教人以文字其地近于中城厥後城間之人凶日起宅天人又降召問占者以不告其凶對曰彼人不問故不告即怒曰汝知其凶亦不告乃分裂其書而去唯存其半字猶百以占凡事吉凶甚驗蓋此占卜書也）美嘗不觀于支字其體如古篆古俗凡稱也天人不係此之人也未知其爲何國字

古
と書いてある。さうして見ると沖繩に始めて文字が現はれたといふ傳説は慶安の頃に出來た遺老説傳に見えてゐるのみならず、慶長の頃に出來た僧の袋中の琉球神道記にも見えてゐることがわかる。うして二書の記事が一致してゐる所を見ると、そこは何等の事實があつたのであらうと推察される。これは兎に角イロハや漢字が輸入されなかつた時代に、古篆のやうな文字が昔沖繩文化の中心であつた浦添の邊で發明されたか、或は昔牧淡泊那覇の三港を有してゐた浦添に外國の文字が輸入されたかをほのめかして居るやうに見える。白石が見たといふ文字がどういふ種類

の文字であつたかは今日之を推測するに苦しむが、眞面白な學者のいふ
よであるから、何か琉球の文字と稱する所のものを見たものは確である。
白石の時代には琉球人の江戸に往來するとが頗る頻繁であつたから、白
石がこの連中からその材料を得たとは明である。

白石と同時代に、琉球へ使した商人徐光が中・傳・信・録を繕いて見る
と、伊魯花四十七文字が沖繩に傳來した歴史や其用法などを叙し、つい
でに琉球に固有の文字が有つたかどうかといふとに論及して、元時代の
學者の説を引照してゐる

元陶宗儀云琉球國職貢中華所上表用木爲筒高八寸許厚三分濶五分飾以
綵釵以錫貫以革而橫行刻字其上其字體科斗書又云日本國中自有國字字
母四十有七能通識之便可解其音義其聯輳成字處髣髴蒙古字法以彼中字
體寫中國詩文雖不可讀而筆勢縱橫龍蛇飛動儼有顛素之遺今琉球國表疏

古 琉 球

文皆中國書陶所云橫行刻字科斗書或其未通中國以前體如此今不可考
これは南島志の記事よりは餘程精しい。すなはち元の時代に琉球が支那
に通じたことがあつて、其時奉つた表疏文が高サ八寸許厚サ三分濶サ五分
の木を刳ねたもの、上に科斗のやうな横文字の刻んだものであつたとい
ふのである。おまけに蒙古字のやうに縦に書く日本字とは自ら別物であ
るといふとまで記してゐる。

琉球が始めて支那に通じたのは明の洪武の初年であつたが、この記事
で見ると元の時代にどうも交通を開いたことになる。さて琉球が正式に支
那に朝貢したのは明の時代であつたにせよ、その一部の民が以前から私
かに交通してゐたとは推測するに六ヶしくもない。しかし古くは琉球と
いふと今日の沖繩諸島の外に台湾をも含めていつたところがあるから、陶宗
儀の所謂琉球が沖繩島のことであるかどうかはつきりせないのである。

鬼に角この邊の研究に指を染める人々は琉球なる名稱に欺かれてはならぬ。ところが五六百年前、臺灣の住民が科斗のやうな横文字を用ゐて表疏の文を書いたとも思はぬ。翻つて沖繩の方を見ると元の太祖忽必烈が四百餘州を併合して帝位に即いた年は浦添の人エゾノイクサモイが所謂爲朝の孫に代つて沖繩に君臨した年である。イロハがこの時代に沖繩に行はれてゐたの之勿論のこと、漢字も亦知られてゐたに相違ないが、二者共に充分には行はれてゐなかつたであらう。陶氏の所謂科斗的横文字は果してこの時代まで其命脈を保つてゐたのではなからうか。もしさういふ文字があつたとすれば、それは沖繩固有のものであつたであらうか。沖繩と南洋諸島との往來は十四五世紀に盛であつたが、元の時代からあつたといふ形跡がある。それは察度が明帝に奉つた貢物の中に象牙、胡椒等の如きものがあるのを見てわかる。シャブ、スマトラ、ヒリ

ピン等で使はれてゐる文字は科斗の形を去つた横文字であるが、陶氏の所謂琉球の表疏文あるものはこれらの中のごれかを借用して書いてあつたのではなからうか。察度時代に牧湊が沖繩第一の港であつて、日本及び諸外國の船の出入が頻繁であつたことは琉球史のわれらに示すところであるが、外國の文字が沖繩に輸入されたとすれば、こゝから這入つたに相違ない。遺老、説傳、や琉、神道記、よある天人がはじめて文字を教へたといふのは、漢字やカナがはじめて輸入された時の歴史をほめかしてゐると思ふ。よしや自ら文字を發明したにせよ、外國文字の影響を受けたに相違ない。しかしイロハや漢字の流行につれて漸次その影を隠したといふのは、その文字が完全でなかつたといふ証據になる。百八十年前に琉球固有の文字の有無に就いて、日清の學者が殆ど同時に相類似せる説を立てたといふことはちよつと面白いとである。さて白

石は江戸に於て古篆のやうな文字を見たといふのに、徐葆光が沖繩まで
しつて之を見なかつたといふとは少しく變な思はれるが、徐使に材料を
供給したのは久米村の學者で、白石の相談相手になつたのか沖繩の傳説
に精通してゐた玉城朝薫であつたといふことを知つたら、思ひ半ばに過ぐ
ることがあらう。とにかくこの時代には琉球に於てさへ固有の文字が有
つたといふ説は古いことを研究する一部の學者の間にのみ残つてゐたもの
と思はれる。

他日浦添邊の地中からロセツタストーンのやうな金石文でも發掘され
たら、琉球神道記や遺老説傳の記事は事實とあるであらうが、何しろ今
日の所では所謂神代文字の有無をかれこれ言ふのと等しく雲をつかむや
うなものである。(三十七年五月二十五日)

琉球の國劇

琉球に「犬の糞にも一つの長所がある」といふ俚諺があるが、琉球に
も何か長所があると思ふ。この頃東京で國劇々々の聲が高いが、これは
沖繩人に取つては左程耳新しい言葉では無い。琉球では國劇は今から百
八十七年前に、蔡温といふ政治的天才が三十六島を經營した時代に始ま
つたのである。この一事を見ても蔡温の政治は花、實もあつた政治であつ
たといふことがわかる。

中山世譜を繙くと、首里向受祜(玉城親雲上朝薫)博通藝技命戲師始
以木國故事作戲教人次年演戲供興於冊封天使宴席其戲自此而始といふと
がある。彼の中山傳信録の著者徐光等が冊封使として渡來した冠船の

琉 球 宮

時である。此の戯曲を作る命を受けた向受祐は少より樂童子として、或は慶賀使謝恩使等の従官となつて、屢次江戸に往來した人で、琉球の古事や古語に精通し、日本文學に造詣が深く、兼て歌や舞や音樂の心得があつた人でゐるから、戯曲を作るには最適當な人でゐつた。彼は材料を自國の神話傳説にとり、謡曲などを参考し、古語を復活せしめて韻文の戯曲を創作した。この時出來上つたのは銘荊子、執心鐘入、二童敵討、孝行の卷、女物狂の五ツで、俗に五組といつてゐる。そこで踊奉行を置いて芝居に關する一切の事務を取扱はしめ、特に上流社會の士族の中から適當な者を選抜して役者となし、次の年の中秋宴に之を首里城内で演じて冊封使の一行に見せた。中山傳信錄にある繪を見ると、この時の舞台は正殿（百部添）と北之御殿との間の庭であつたといふことがわかる。さうして後で他の場所で演じて一般人民に見せたといふのである。かく

琉 球 の 國 劇

の如くあらゆる美術を總合して出來た劇を組踊と名づけたのは面白い。琉球では上世からコチリ又はシノゴといつてオモロやウタに和する簡單な舞があつて、組踊以前もあつても踊といふもの稍發達し、番組を作つて演奏し、宴席の興を助けしめたが、なほ向受祐が作戲の命を受けたと聞いて、踊りが物言ふとやあるといつて、人舉つて喰つた。しかし演ずるに及んでは皆感嘆の涙を禁めあへなかつたのである。向受祐が作つたといふ樂劇は詞の用ゐざまといひ、舞ひかたといひ、各特色があつて、その苦心の程が察しられる。決して今日の組踊など、同一視すべきものでない。世に脚本を作る人は多い。しかし文句をならべる外に、謡ひも舞ひも音樂も出來る人はいない。わが向受祐はかのワグネルの如くこれらの凡てが調和して歌ひ出す方であつた。彼れ以來組踊を作る者輩出し、今日では殆んど百を以て數へることが出來るが、多くは彼れの文句

を學んで、技藝の点は全く顧みず、徒らに冗繁な文句を長々と連ねたばかり。もし彼れの組踊を能くすれば、後のは拙き田舎歌舞伎の如きものである。沖繩の組踊は五組で始まつて、五組のみで終つた。

古
それは兎に角此の時に始まつた國劇之冠船毎に演せられて、明治の前まで續いた。過去の沖繩では役者は實に國家の役員であつた。如何に藝術を重んじたかといふことがわかる。この國劇の餘波は市街や村落にたよび、那覇でハ市の劇が興り、各村でも村の劇が興つた。今日でも田舎にいつたら、この遺風が見られる。岸本事務官も廢藩置縣前に那覇から選抜されて鹿兒島の奉行の宴席で扇子舞を演ずる役者たるの榮譽を荷はれたさうである。昔の沖繩はとにかく芝居の沖繩であつた。誰れやらが廿世紀は劇の時代であると豫言したが、成程日本でも國劇々々の聲の漸く高くなつた。所がそれをほんの理想である。而もりの理想が小さいけれ

琉球古

ども 百八十七年前に於て實現されてゐる。思ふにかういふことは專制政治であつたから容易く實現されたのであらう。(三十九年十二月三日) 琉球新報所載)

ごわくあやみやよ、こかね木は植へて、こかね木か下、きみのあじの、しのぐりよわるきよらや。こえくあやみやに。

(首里王府たさうし)

あねべたやよかて、しのぐしち遊で、わした世になれば、たごめ

(恩納なべ)

地頭代主いられ前お取次しやべら、首里がなしみおやだいら、夜もまやべん、あまん世のしのぐおゆるいめしやうれ。

(全 上)

琉球の國劇

琉球音楽アカイニコ
者の鼻祖アカイニコ

三六

音楽は人類共通の言語であるとの言もあれば、琉球の音楽が琉球語を解せない人の心耳にも感通するといふことは、疑ふべからざる事實である。實に聽いてうんざりするやうな琉球の音楽の琉球數百年の悲哀なる歴史を物語つてゐるやうな氣がする。私は之を辛抱して聽いてゐるとの出來ない人にと琉球民族の心理はとても解せまいと思ふ。かつて沖繩縣立中學に教鞭を執つてゐた飯沼といふ人はこの音楽を科學的に研究して琉球が世界に向つて誇るべきものがあるとしたら、それは今の音楽であらうといつた。そして氏は時々之を東京の真中で紹介してゐる。沖繩縣人は宜しく飯沼氏の感謝すべきである。

さて吾人の誇りとす可きこの音楽が何時頃誰れによつて始められたのであるかは、讀者の間かうとする所であらう。この名譽を荷ふべき人は三百八九十年前にゐたアカインコといふ人である。沖繩の音楽を大成しかと稱する野村安趙氏の著書「絃聲之卷を繙いて見ると、

本國絃聲の其初をたづぬるにふるき言の葉に、

歌と三味線のむかしはじまりや犬子ねあがりの神のみ作

千はやぶる神の代の跡をのこして今までもうたひやうたふ。

球 琉 古
といふとが書いてある。この犬子ねあがりはとりもなほさずアカインコのとである。たもろ双紙八の巻おもろねあがり、あかいんこがおもろたさうしによれば、この人はオモロの名人であつてオモロチアガリと時を同じうした人である。この双紙にはアカインコを謳歌したオモロが二十六首もある。今その中の一首をあげて見ると、

三六

あかのおゑつきや
 ねはのたゑつきや
 ともゝとちよわれ
 福しかはのあらぎやめ
 くもさうせあらざやめ
 いーぎや命てば
 いしはわれる物
 金かのちてば
 かねはひぢやむ物

之を譯して見ると、阿嘉の長者よ、根波の長者よ、千年もあがらへかま
 華生ゆる小川の流るゝかぎり、汲む清水の湧き出づるかぎり。君が命を
 石に譬へばや、石の破れる物あるを如何せん。君が命を金に譬へばや、

金は曲る物なるを如何せん。といふことになる。金石といへども損缺まると
 福り、ア、何にか譬へてこの長命にして多福なるを謳はむ。といふ程
 の意である。之を讀むと三四百年前の沖縄人が如何はかりその詩人を尊
 敬してゐたかといふとがわかる。しかし月日の經つと共にこの詩人の名
 も全く忘れられて了つた。讀谷山楚邊には毎年九月廿日に赤犬子の祭と
 いふのがあつて土地の人達は犬騒ぎをするが、彼等はりの拜んでゐる神
 が如何なる神でゐるか知らぬ。たゞ赤犬子といふ人は偉い人であつた
 が、人間と赤い犬との間に出来た子であるので赤犬子と名づけたといつ
 てゐるのである。これは一種の民間語源説といふもので、世には今で
 もかういふ語源説をふりまわして得意になつてゐる人がある。又楚邊に
 は赤犬子原といふ地名もある。もとのオモロ主取安仁屋翁も赤犬子はお
 もろの名人アカインコのとたと私に語つて居た。して見ると、赤犬子は

アカインコの傳説したものだといふことがわかる。眞境名笑古氏の研究した結果によれば、アカインコはもと津堅島の産で三味線を持って放浪してゐた人だといふのである。

アカインコは詩人であつたと共に、又音楽者であつた。それは彼を謳つた「歌と三味線のむかしはじまりや」の歌を見てもわかる。野村氏も亦さういふことを言つてゐる。兎に角この歌は昔時から解しにくい歌の中に算へられてゐたらしい。しかし私は之を沖繩で始めて歌を三味に合せて詠つた者は犬子ねあがりといふ神だと解したい。オモロの名人をオモロテダ（詩王）といつたり、詩人や音楽者を神といつた所を見ると、琉球民族は古くから藝術を愛する傾向を有つてゐたといふことがわかる。

古い記録を見ると三味線は明の嘉靖の頃支那から琉球に渡り、それから日本に渡つたことである。故小中村博士の歌、舞、音楽、略史にも、

古 琉 球

三絃は、正親町院の永祿年間、琉球より蛇皮線二絃の器を傳へ、和泉國堺津の琵琶法師小路といへる替者に、人のとらせしを中小路いたく愛て、朝夕に手まさぐれど、其調をしること能はず、故に初瀬の觀音に一七日參籠して祈請し、靈夢の示を蒙りて、階を下るをり、大中小の三絃足に掛りまつはりたるを得て、蛇皮線よかけて調べつゝ、遂にめでたき色音を彈出でぬ（中略）

糸竹初心集（寛文二年刊）には、文祿年間、石村檢校琉球島に渡り三絃の小弓を得て歸り、京にて三味線を作り出せりといへり。云々嬉遊笑覽云、糸竹初心集には、三線を小弓よりといひ、大幣には、二絃なりしを一絃を添へたりといひて、其説同じからされども、造り改めて新に彈出しやうにいへるは、いづれ。私説なるべし、こはもとより三絃子にて、琉球の彈きやうを習ひて、其後さまざま彈出し

應ずる爲に醉生夢死の人民となつたが、醉生夢死なる彼等はいつしかホ
 ーマーのユリセスの中に書いてあるセーヌの島の音楽の様なものを作り
 出した。そして其音楽は沖繩人をいよ／＼ますます／＼醉生夢死の人民と爲
 しをはつた。當時の沖繩人の心理状態は誠に能くこの優暢な音楽を聴く
 に適してゐたのである。所が三百年間の長い睡眠から覺めた所の沖繩人
 は最早この音楽を聴くに絶えぬやうになつた。近來素人の音楽の調子が
 段々と早くなつて來たのは頗る注意すべきことと思ふ。私はあの優美なる
 音楽を決して悪くいふのではないが、あゝいふゆつたりとしたしふい曲
 を今日以後の氣の早い青年が承継ぐとが出来るか疑問である。兎に角
 過去に於てあれ位な音楽を發達させた沖繩人のものであるから漸次新時代
 に適合するやうな音楽に作りかへるかも知れぬ。かつて三味線を日本に
 傳へたものある琉球は他日音楽の天才を日本の音楽界に送らぬだらうか

未來のアカインコは現今の學生の中にあるだらうか。木の上で木の實
 でも喰つてゐる子供の中にあるだらうか。四十年沖繩新聞所載)

まこゑ、さすかさが、よけ、よう、よなおせ世うなおき、(世を直せ)

とよむ、さすかさよ (貴き佐司笠按司よ)

けおの、あけごまよ (今日の曙よ)

けおの、あけだち (今日の曉に)

あがるいに、みやれば (東の方を眺むれば)

ただがあまに、みやれば (日の穴を眺むれば)

むらさきの、あやくも (紫の綾雲)

むらさきの、のちぐも (紫の横雲)

しま中ね、とたり (島の中を横ざれり)

國あかね、とおり 國の中を横ざれり (隔りきるとのたもろた双紙より)

術も器も彼よりは、勝れし事とされるべし。云々

升庵外集(廿二)に、三絃始元時、また五雜俎(十二)に、又有所謂三絃者、常合簫而鼓之、然多淫哇之詞、倡優之所習耳、とみわて元代始て作れる樂器なるを、琉球にも傳へたるあり。云々。

鼓弓も、三絃と同じころ、琉球より傳ふ、彼國は毒蛇多き所なるが、ラヘイカといふ虫ありて、能く毒蛇を食ふ、ラヘイカの鳴聲、小弓の音に少しも違はざる故に、蛇を退けん爲に専ら弾きたりといへり。云々といふやうな面白いことが見えてゐる。兎に角日本では古來三味線は支那から琉球を経て來たものといふことになつてゐる。さうしてアカインコは三味線が舶來して間もなく、オモロやウタを之に合せて弾いたのでゐる。

古い時代に於ては、琉球には詩人といふ特別の階級もなく、音樂者と

いふ特別の階級もなく、大方の人が詩人で、大方の人が音樂者であつたが、この時代に歌は歌人の歌と歌人でない人の歌とに分れ、音樂も音樂者の歌と音樂者でない人の歌とに分れたのであらう。さうして一方は自然のまゝ、一方は手入れをされて、今日に至つたのであらう。

歌のとは暫く擱きて、所謂音樂者の音樂の發達についていへば、明の天啓の頃に湛水親方が出で、アカインコの音樂に大改善を加へ、蔡温の時代に屋嘉比親雲上が出で、始めて譜を作り、豊原、仲田、知念等の音樂者の手を経て安富祖に至つて大成された。この研究は友人眞境名笑古氏の手を煩はさねばならぬ。

二三年この方、沖繩人の自覺にもなつて、琉球固有の音樂が方々の音樂會で演せられるやうになつたが、これは一時の現象であつて永くつゞくべき現象ではないと思ふ。過去三百年の間に沖繩人はうの境過に順

應ずる爲に醉生夢死の人民となつたが、醉生夢死なる彼等はいつしかホ
ーマーのユリセスの中に書いてあるセーレスの島の音楽の様なものを作り
出した。そして其音楽は沖繩人をいよ／＼ますます／＼醉生夢死の人民と爲
しをはつた。當時の沖繩人の心理状態は誠に能くこの優暢な音楽を聴く
に適してゐたのである。所が三百年間の長い睡眠から覺めた所の沖繩人
は最早この音楽を聴くに絶えぬやうになつた。近來素人の音楽の調子が
段々と早くなつて來たのは頗る注意すべきと思ふ。私はあの優美なる
音楽を決して悪くいふのではないが、あゝいふゆゑたりとしたしふい曲
を今日以後の氣の早い青年が承継ぐとが出来るか疑問である。兎に角
過去に於てあれ位な音楽を發達させた沖繩人のとであるから漸次新時代に
に適合するやうな音楽に作りかへるかも知れぬ。かつて三味線を日本に
傳へたところある琉球は他日音楽の天才を日本の音楽界に送らぬだらうか

未來のアカインコは現今の學生の中にあるだらうか。木の上で木の實
でも喰つてゐる子供の中にあるだらうか。四十年沖繩新聞所載)

きこゑ、さすかさが、よけ、よう、よ、な おせ 世うな おさ。(世を直せ)

とよむ、さすかさま (貴き佐司笠按司よ)

けおの、あけごまよ (今日の曙よ)

けおの、あけだちに (今日の曉に)

あがるいに、みやれば (東の方を眺むれば)

ただがあるに、みやれば (日の穴を眺むれば)

むらさきの、あやくも (紫の綾雲)

むらさきの、のちぐも (紫の横雲)

しま中ね、さたり (島の中を横ざれり)

國あかね、さおり 國の中を横ざれり (あけきさるこのねもろた双紙より)

オモロ七種

三

はしがき

オモロは、はしがきは二十二冊、歌數總べて千五百五十一首、(中に重複したのもあるが)うれでも千五百首を下らない。西暦十三世紀の初葉から十七世紀の中葉まで殆ど四百年間のオモロを収めたもので、琉球の萬葉集ともいふ可きものである。オモロは我等の祖先が我等に遺した最古の文學で、古くは今日の歌人が三十字詩を詠むやうに、一般に詠まれてゐたが、島津氏に征服された後頓に衰へて、いつしか祭司詩人の専有となり、元來詩歌といふ廣い意義を有してゐたオモロは遂に神歌といふ狹い意義に解せられるやうになつた。そして近代の祭司詩人と今の神主が神

古 琉 球

詞を綴るやうに、古い銘にはめてオモロを作つたのである。オモロの中には琉球の創世紀を初として、王者を謳うたもの、英雄を謳うたもの、戦争を歌うたもの、航海を歌うたもの、詩人を歌うたもの、風景を歌うたもの、日月星辰を歌うたものなどがある。唯一首戀愛を歌うたものもある。世にオモロを措いて琉球固有の思想と琉球古代の言語を研究す可き資料はない。オモロに就いては他日精しく述べるとして、こゝにはオモロの代表的ものを抜き出して紹介することにせう。

一、むかしはじめからのふし

むかし はちまり や てだた 大ぬし や

きよらや てりよわれ

せのみ はちまり よ

てだいちろく が

種七口モオ

てだはちろくが
 おさん ーちへ ぞおれ ば
 さよこ ーちへ みおれ ば
 あまみきよ は よせわちへ
 えねりきよ は よせわちへ
 えま つくれ て、 わちへ
 くよ つくれ て、 わちへ
 こゝらきの えまゝ
 こゝらきの くにく
 えまつくら ぎやめも
 くにつくら ぎやめも
 てだて うらぎれて

球 琉 小 舟

此の巻、うらぎれて
 あまみや すちや なす
 しねりや すちや なす
 いやれば すちや なしよわれ
 此とあむらたさうしりの巻ありき、あむらたさうしの二番目にあ
 る琉球開闢のオモロである。今その意譯を掲げる前にちよつとことばの
 意味を解釋して置く必要がある。あむらたさうしり、今日の琉球語の「アツ
 ナ」といふことで旅行といふ意である。えまは歌のことで今日の琉球語に意味
 は多少變つてゐるが「イト」(立つたり坐つたりする時に出す聲)といふ
 ことになつて違つてゐる。さうほるとありき、えま、旅行の歌といふこ
 になる。てだ、せのみ、何れも日神の意。大ぬしは神の尊稱。てだい
 ちらく、てたはちらくは日神の異稱。おさんしちへ、さよこしちへは何

れも俯しての意。おまみきよ、しねりきよと琉球群島を創造せし二柱の神。よせわちへは召し給ひて。てははご。わちへは宣ひて。こゝらきは幾許。今の方言のクサキーに當る。ぎやのは迄。ぎやでともいふ。今なほ宮古や大島の方言に遺つてゐる。うらきれては待ち遠しがりて。「朝ま夕ま通て見る自由のなれば、見欲しやうらきらさのよでしやべが」のうらきらさと同語。あまみや、しねりやは琉球民族の故郷、即ち高天原のやうな所。すぢやはすだの轉訛、「首陀も、利利も」の首陀に同じ、もご梵語の四階級の中のスードラから來て、人類といふ意義をとつた言葉。なすなは産す勿。まやればは然れば。あしよわれの産ま給へ。ちへ、はちと發音す。このオモロを意譯して見るとかうである。

最初には神ありて、八柱を照せり。日神俯して下界を瞻給ふに、島の如きものありければ、則ちアマミキヨ、シチリキヨ二柱の神に詔して

之を修理しめ給ふ。二神詔のまよ、降りて數知れぬ島々を造る。日神その成るを遅しとし、更に詔して、そこには天つ國の民の如き者を造らせして、人類を造れ、と宣ひき

中山世鑑にはこの神話の形が次のやうになつてゐる。

古 兼昔天城に阿麻美久といふ神御座しけり天帝これを召して宣ひけるは
 琉 此の下に神の住む可き異處有りされど未だ島と成らぬこそくやまげれ
 降りて島を造るべしと下知し給ひける阿麻美久畏り降りて見るに地
 とは見えけれども東海の浪は西海に打越し西海の浪は東海に打越して
 球 まだ島とはならざりけり去程に阿麻美久天へ上り土石草木を賜らば
 島を造り奉らんとぞ奏しける天帝敬感有つて土石草木を賜はりければ
 阿麻美久土石草木を持ち下り島の數をぞ造りてけり……阿麻美久又
 天へ上り人種子をぞ乞給ひける云々

試みこの傳説を古事記の開闢の條の一節に比べてみよう。
 天つ神もろの命もちて伊邪那岐命伊邪那美命二柱の神にこ
 のたよりよへる國を造り固めなせとのりごちて天の沼子を賜ひてことよ
 さし賜ひき故二柱の神天の浮橋に立たしてそのぬほこをさしおろして
 高きたまへは懸こをろくに高き鳴して引き上げ給ふ時その矛のさき
 より垂る懸積りて島と成る是洲能基島なり
 著まゝ類似といはねばならぬ。この一つの開闢説はポリネシア群島の開
 闢説にある。

世界の初は天と地とのミなりが天神タンゴラ一片の土塊を下したる
 より凝つて地となり漸次擴張しぬ
 といふのにも似通つてゐる。しか左島國で出来た神話傳説に何れも類
 似した点があるといふを言つたまで、これによつて琉球群島とポリ

ネシア群島との間に關係をつけようとするのでとかい。
 ろれは兎に角、このオモロを讀んで誰れでも氣のつくとは、第一韻を
 ふんでゐると、第二盛に對句が使つてゐると、第三萬葉に於ての如く大
 方は定數のシレブルで成立つてゐるが、どこまでもうれによつて制限さ
 れるとのないとである。そのシレブルに定數のないのがあるのと盛に對
 句を使つてゐるとはオモロが希伯來の詩歌に似てゐる点だ。此点に於
 てオモロの根本形式は希伯來詩と同じく並行體である。そして並行する
 前後の兩脚は語詞が異つて居るだけで、意味は餘り變らない、一体同じ
 思想を並行的に重複すると云ふとは少しく冗漫に聞ゆるものであるが、
 この冗漫なる所に琉球民族の特質がよくあらはれてゐる。彼等は日常の
 言語に於ても能く對句を使つたのみならず、地名に於ても又さういふ風
 なものを用ゐた。これは文字を有せない人民には覺ゆ易い詩形ではある

が、至つて幼稚な詩形である。しかし後には「晝なれば、心通ひ通て、夜なれば夢かよひ通て。」といふやうな對立的對句。出て來た。兎に角かういふ詩形は人間思想の律動の根本的形式とも言ふべきもので、感情の動靜心臓の鼓動に協ひ、呼吸の高低聲の振動も能く協つて、而も二倍の印象を興ふる効がある。かういふ詩形が感情的で音樂的なる琉球民族の間に興つたのは無理ならぬことと思ふ。

オモロ七種

オモロは皆にその詩形に於て希伯來詩と類似してゐるばかりでなく、其内容に於ても希伯來詩と同じく宗教的分子に富んでゐる調子が高い。右に出したオモロにある

あまみや すぢや なまか
しねりや すぢや なすな
しやれば すぢや かしよわれ

といふ思想は舊約聖書の詩篇第八篇にある

只すこしく人を神よりも卑くつくりて榮と尊貴を蒙らせ又これに手のわざを治めしめ萬物をその足下よたきたまへり。

といふ思想に酷似してゐる。琉球民族の神の觀念や風俗習慣と猶太人のそれとを比較してみると案外に似た点の多いのを見て驚くことがあるが

古琉球

吾輩は十數年前加奈太の一學者が日本人は耶蘇紀元前シリヤ邊にゐたヒタといふ慍悍な遊牧民の後裔だといつたのを想起して一種の感打たれる。もしこゝに日本人種とセム人種との間に何等かの關係を付けようといふ人があつたら、固有の文明を破壊された日本々土より固有の文明を夥しく保存せる琉球群島に眼を轉さべきである。そしてかういふ研究に指を染めようとする人は是非ともこのオモロといふものを研究せなければならぬ。つひ横道に這入つて變なことを言つて了つたが、この開關のオ

モロはた、もろさうし、の中ではさう長い方ではないが、兎に角長い方の代表者として出したのである。實際オモロの長たらしいのよなるこのオモロの三四倍位のもある。

二、あがる三日月がふし

- 種七口モオ
- あがる 三日月 や
 - あがる かなまゆみ
 - あがる あかぼし や
 - あがる かままき
 - あがる ぼれぼしや
 - あがる が さしくせ
 - あがる のちくも は
 - あがる まなき、おび

これはありき、あさ、のた、もろ、おさう、しの二十四番目のオモロで、天體の美を歌うたオモロである。試みに手譯を掲げてみよう

- 古 琉 球
- あれ 天なる三日月は
 - あれ 御神の金真弓
 - あれ 天なる明星は
 - あれ み神の金鏃
 - あれ 天なる群星は
 - あれ 御神の花櫛
 - あれ 天なる横雲と
 - あれ 御神の白布帯

至つて單純ではあるが、さながら希伯來の詩篇を誦する心地がする。これは多分我等の祖先が夏の夜の航海中、熱帯の蒼穹を仰いで、星昂の燦

爛たるを觀、覺えず聲を發してその美の本源なる神を讚美したものであ
らう。調自ら整うて、宛然奥妙なる音楽を聞くが如き思ひあり、而も
の想像の雄渾濶大なる、到底梅が枝に鶯の聲を聞いて喜ぶ所の詩人が想
ひ及ぶ所ではない。渺々として際涯なき大洋のただ中にあつては、目を
歡ばし、耳を樂ましめ、心を跳らすもの少く、天空に滴たる如く懸れる
宿昂が我等の祖先を慰籍した唯一の友であつた。南島の星月夜の空に憧
憬の情を恣にしてゐる海人の姿も目に見ゆるやうである。うの昔ダビデ
がカルデヤの空を眺めて、「もろくの天は神の榮光を顯はし、蒼
穹は其手の工を示す……」と叫んだ讚嘆の刹那も思ひ合はされて何と
なく心懐しい氣がする。とにかく沖繩の風光は明媚である。曾つて三好
理學博士の「自分と熱帯各地を旅行して來たが未だ沖繩の如き愛しい熱
帶的景色の現はれて居る島は見たとがない」といはれたことである。

種七口モオ

琉球古

先達植物採集に來てゐた獨乙人アンドレー氏も頻りに那覇附近の風光を
賞讃して、彼れが幼少の時から住みなれし伊太利ミラノに似てゐるとい
つてゐた。成程琉球の日本の伊太利であらう。年中雲霧に蔽はれがちな
大和山城にゐた萬葉古今の詩人はかういふ自然は夢にだも見あかつたで
あらう。古今や萬葉にこのオモロのやうな歌のないのは無理でもない。
二三年前東京にゐた頃このオモロを昇曙夢氏に見せた所が、氏は大に賞
讃して、早速之を「向上主義」といふ雜誌に出して、琉球民族を紹介し
て呉れた。其後島袋濤韻君も之を馬場孤蝶氏に見せたさうだが、氏も亦
いたく賞讃して、西詩の句ひがゐるといはれたこと。

三、かつれんまみなごがぶし
かつれんまみにやごば やておちへ
中ひやくあこまごは やておちへ

種七口モオ

ひるなれば きもかよい かよて
 よるなれば いめかよい かよて
 にしもち の ぢやなみち が いきやまの
 ひがみち の やぎもち が いきやしゆ
 ひかみち や やぎ の おもい ぎや まちより
 にしもち や ぢやな の おもい ぎや まちより
 いちや やけな中もち ちよ いきや しよ
 これは十四の巻い、ろく、の、ゑさ、おもろさう、しの十五番目のオセロで、千
 五百五十一首唯一の戀歌である。之を文字通りに譯してゐると、
 勝連乙女を見てしより
 中百名乙女知りてより
 晝と心の通ひに通ひ

球 琉 古

夜は夢路を辿りに辿り
 西道の謝名道を行かばや
 東道の屋宜道を行かばや
 東道には屋宜の戀人まてり
 西道には謝名の戀人まてり
 いでや屋慶名中道をこそ行かめ
 といふよになる。單純ではあるが、眞情あふれて、宛然萬葉集中のもの
 である。之も前のオセロと共に作者は知れない。言葉と内容とによりて
 判断してみると、大方は首里邊の身分のよい人で、在原業平のやうに戀
 に浮身を窺した人の作であつたらしい。此は新に勝連の里に女を拵へた
 もの、その通ひ路なる謝名と屋宜にも亦古いなぢみがあるので、も
 やこつりり通ふ途中で、めつけられたら大變だといふ意を歌うたのであ

る。三四百年前の戀の琉球がまのあたり見えるやう。

晝なれば心通い通て
夜なれば夢通い通て

オ
の如きは今の沖繩の歌人には耳新しく響くであらう。しかし古くも能く
使はれたものと見えて、奄美大島の歌にも

モ
夜や夢通ひ晝や心通ひ我が胸の中や閑にや無らぬ

七
といふ歌がある。千五百五十一首中、二さい戀歌であつて見れば、大
切なオモロといはねばならぬ。千五百五十一首中戀歌がたゞ一つは不

思議である。オモロの詩人は果して戀愛を歌はなかつたであらうか。否
々断じてさうではない。歌うたとは澤山歌うたに相違ないが、オモロが
政府の手で編纂されたので、多分戀歌はぬきにされたのであらう。所が
此時間違つて這入り込んだかつれんまみにや、こがふしが當時の戀歌の見

本として遺つてゐるのは嬉しいことだ。

四、きみかあしふし

あかのたるつきや

ねはのおゑつきや

とももこちよわれ

あしかわのあらぎやめ

くもさうすあらぎやめ

いしぎやのちでは

いしはわれる物

かねがのちてば

かねはひぢやむ物

八の巻にも、ねあがりあかいんこおもろ、たさうしの七十四番目のオモロ

古 琉 球

で、オモロ詩人アカイノコを謳歌したのである。之を譯してみると、

阿嘉の長者よ

根波の長者よ

葦イヌナガのカレ

葦生アサヒゆる小川の流るゝかぎり

汲む清水の湧き出づるかぎり

君が命を石に譬へばや

石の破れる物なるを如何せん

君が命を金に譬へばや

金と曲る物あるを如何せん

四百年前の沖繩人がこの位その詩人を尊敬したかといふとがわかる。混効験集を案ずるに、あかいんこはあかのこ或はねはのこの事で、詩人の

古

琉

球

名である。たもろねあがりと世を同じうした人で、時の人は之をたもろてだ。(詩王)と稱へてゐた。尙眞王時代の人である。オモロが衰へるにつれてこの詩人の名もいつしか忘れられた。讀谷山楚邊では毎年九月廿日に赤犬子の祭があるが、土地の人々その拜んでゐる神がどんな神であるかを知らない、たゞ赤犬子といふ人は偉い人で人間と赤い犬との間に出来た者だといつてゐる。又楚邊又は赤犬原といふ地名ものこつてゐる。このアカイノコが詩人であつたと同時に音楽者でゐたとは野村安趙氏が著書「琉聲之卷」よ

本國琉聲の其初をたづぬるにふるき言の葉に

歌と三味線のむかしはじまりや、犬子ねあがりの神のみ作

千はやぶる神の代の跡をのこして今までもうたひやうたふ

といふとを見てもわかる。この「歌と三味線のむかしはじまりや」とい

ふ歌は一見した所では、アカインコが歌の鼻祖でもあり三味線の鼻祖でもあるやうだが、アカインコが琉球の詩祖でないとは明白であらう。之は琉球で始めて歌を三味線に合せて歌うたのはアカインコだと解した方が可いと思ふ。小中村博士の歌・舞・音・樂・略史を讀むと、三味線は支那から琉球に渡つて、それから日本に渡つたといふとがゐるから、アカインコは三味線が舶來して間も無く自國の歌を之に合せて歌つた最初の人であらうと思はれる。このアカインコを謳うたオモロに二十六首程もあるがアカインコが作つたといふオモロは次に出る二つしか見當らない。まかし九十九分通り作者の知れないオモロさうしの中にはその作も亦少くないと思ふ。これから短くて調のよいオモロを二つ三つ紹介してこの稿を結ぶ。

五、あかいんこかねたてはかふし

オモロ

あだにや の いぢみ さうせ ましちやらの うらやも さうす
 きもあぐみの いぢみ さうす

これは二の巻首里王府のたさうし（中城越來のオモロ）の二十九番目のオモロである。

古 安谷屋の清泉よ、諸侯の羨む清水よ

げにもゆかしき清水よ

琉 といふ程の意である。これは水に不自由なる君臣が旱の時に、共同して井戸を掘つて水を得た喜びを歌つたのであらう。天地の萬物を悉く活物の如く觀察して之を歌ひ、且つ官民親和して、喜びを衆と共にするの美を寫す、其情真に掬すべきものがある。舊約の民數紀異中の「井戸の歌」を讀む心地がまる。

六、くに中のまよりもり城がふし

あだにやの わかまつ 福われ わかまつ よださちへ うらたそう
わかまつ きもあくみの わかまつ

これも亦同双紙中にあり。安仁屋家の寫本には朱書で「あかのこ申名
人或時安谷屋邊に罷過候折童子ひとり笹の荷をかたげ參候を其笹ひとつ
やらねと申されば則童子荷を卸し鎌にて笹の皮をさり四つにわり拵さ
れば名をばいかよとかたればまつと答その時給り申おもしろ也」と傍註が
してある。アカインコの作である。その意味は、

安谷屋の若松よ あはれ若松よ 枝繁りて浦裝う若松よ げにもゆか
しき若松よ

といふことになる。このオモロは陶氏中城若松の子孫の系圖にも載せてあ
るが、うれにはあだにやが中城となつてゐる。このオモロは組踊執心
鐘入の主人公にされた中城若松の有望なる未來を祝福したものである。

右 上 琉 球

あだにやの わかまつ あわれ わかまつ よださちへ うらたそう
わかまつ きもあくみの わかまつ

これ亦同双紙中にあり。安仁屋家の寫本には朱書で「あかのこ申名
亦或時安谷屋邊に罷過候折童子ひとり笹の荷をかたげ參候を其笹ひとつ
やらねと申されば則童子荷を卸し鎌にて笹の皮をさり四つにわり拵さ
れば名をばいかよとかたればまつと答その時給り申おもしろ也」と傍註
がしてある。アカインコの作である。その意味は、
安谷屋の若松よ あはれ若松よ 枝繁り 浦裝う若松よ げにもゆか
しき若松よ
といふことになる。このオモロは陶氏中城若松の子孫の系圖にも載せてあ
るが、うれにはあだにやが中城となつてゐる。このオモロは組踊執心鐘
入の主人公にされた中城若松の有望なる未來を祝福したものである。

かたは琉歌の吐於ける研究の他、自注を施して、これには三十字詩なる琉歌にちむ七調あるを述べし。琉球の歌人は之を琉球に利用する能事出来なかつたと見えて、琉歌集の中にもこれは餘り出てゐない。たゞ小橋川朝昇氏の大歌集の分類中に、全詞といふ目があるが、句の初か句の終が悉く同一なる詞になつたのを六首程あげてあるばかり。

吹出しも美さ水かみも美さきんみり美さ引くが美さ(痘瘡の歌)。

これらは左程耳障りにもならないが、

思て思かへち又思て見ちも思ひかわさらぬ思のくれしや

自由ならぬ自由の自由なよてからや自由ならぬ自由も自由さきもる

寅のはの風に寅のはに出ち虎の走りまめて虎の門口チヤウチ

不達つたわさどらしく面白くさい。

入毎に安仁屋あんにやて言ふすがあんにやてやあらぬ安仁屋やすが

生至るてはやがて狂歌のなりそにないである。しかし何れも頭韻法の一種には相違ない。兎に角口語で頭韻法を盛よ使つた沖繩人が百尺竿頭一歩を進めて、その歌に之を使ふことが出来なかつたのは口惜しいことをある。たまたま、

孝の葉や木もれ竹の葉やだきゆり蘇鉄葉の如にそろていほわれ

こは金武にはに竹や安富祖竹やねや志良垣にはりや恩納

の如きものかないではない。今は故人どあつた薩摩の琉歌詩人眞世田某が國頭出張中、

かかんちなしちいほれがかんちほしち我身や久志も國頭もめくてきやへ

此の八音の

此の八音の歌の如きはとにかく頭韻法になつてゐる。仲尾次政隆翁が八音

山に鳥流來るつて行く途中、久米島のマキンゴツで秋夜を對録して八重花の久米島の戀しフキンデヨも深けてつれなさを一人ららめ

の如き立派な頭韻法である又泊の某が録んだ某の國語もさうさうな

は國語の如き立派な頭韻法である。今これらはよんでみれば、其の目的

の如き立派な頭韻法である。今これらはよんでみれば、其の目的

さて頭韻法はタタラに同語を弄んで作るべきものではない、一種の目的

が酒の氣使ふべきものである。歐羅巴の詩人が意味だけ下充分に表はせ

ぬか所を頭韻法によつて補つたといふ風でなければならぬ。たとへば、風

を吹かすやうな所にはサ行かハ行の頭韻法を使ふとか、物陰樹影にはオ行

の如き立派な頭韻法を使ふといふ風にして、其意味の充分に表はせぬ

の如き立派な頭韻法を使ふといふ風にして、其意味の充分に表はせぬ

三葉

うに成功するかどうか授合は出来ぬ(四十二年七月三日) 三葉

病床日記の一節

遊女よ

三葉

遊女よ、何だか新しい意味がわかつたやうな気がする。これは大方は、
 鳥ゆる物開かぬ鳴らぬ物開きぬす、この世からあの世近くへつらふ、
 酔つたのがある。不斷の淋しい歌とばかり思つてゐたが、今病床で讀ん
 で見ると、何だか新しい意味がわかつたやうな気がする。これは大方は、
 來世の世を去らうとした時、來世の存仕に就いての感じを語つたので
 であらう。は、一人の靈魂はあの體力の衰へるにつれて、益々光澤を増すの
 では無からうか。佛蘭西の詩人で又小説家であるベノワが、
 來世の存在に關してかうた言葉の一節にも、
 わが生涯の終りに近くに及んで、他界の美音益々明瞭にわが耳に達す

三葉

病 床 日 記 の 支 節

此の支節の(一)或(二)或(三)或(四)或(五)或(六)或(七)或(八)或(九)或(十)或(十一)或(十二)或(十三)或(十四)或(十五)或(十六)或(十七)或(十八)或(十九)或(二十)或(二十一)或(二十二)或(二十三)或(二十四)或(二十五)或(二十六)或(二十七)或(二十八)或(二十九)或(三十)或(三十一)或(三十二)或(三十三)或(三十四)或(三十五)或(三十六)或(三十七)或(三十八)或(三十九)或(四十)或(四十一)或(四十二)或(四十三)或(四十四)或(四十五)或(四十六)或(四十七)或(四十八)或(四十九)或(五十)或(五十一)或(五十二)或(五十三)或(五十四)或(五十五)或(五十六)或(五十七)或(五十八)或(五十九)或(六十)或(六十一)或(六十二)或(六十三)或(六十四)或(六十五)或(六十六)或(六十七)或(六十八)或(六十九)或(七十)或(七十一)或(七十二)或(七十三)或(七十四)或(七十五)或(七十六)或(七十七)或(七十八)或(七十九)或(八十)或(八十一)或(八十二)或(八十三)或(八十四)或(八十五)或(八十六)或(八十七)或(八十八)或(八十九)或(九十)或(九十一)或(九十二)或(九十三)或(九十四)或(九十五)或(九十六)或(九十七)或(九十八)或(九十九)或(一百)

蕪城懷古

程順則

隋帝豪華遊草中蕭條二十四橋感鶯翻廢苑香雲散龍去長江錦水空祇有
 二湖留勝蹟更無父老說新宮墮花冷落峨眉老戀見蕪城夕照紅

この支節の可憐なるが八重山乙女

中皇主の美醜

此の支節の可憐なるが八重山乙女を聯想せざるを得ない。此は
 宮古島に往つたことのある人は、白明井を知つてゐるであらう、此は
 宮古島の飲料水の供給を此處に仰いでゐたのである。宮古島に往つたこと
 無
 人
 白
 明
 井
 の
 名
 を
 聞
 く
 毎
 々
 宮
 古
 島
 の
 大
 將
 の
 案
 内
 を
 して
 入
 重
 山
 島
 へ
 上
 陸
 する
 入
 重
 山
 乙
 女
 を
 聯
 想
 せ
 ざる
 を
 得
 ない。

可隣な八重山乙女

見親が軍門の飾ゆになつたのは容色花を欺くやうな一人の八重山乙女であつた。彼の女がアカハチの女であつたかどうかははつきりわからぬが、せもかく彼照間島の生れで、堂上の珠を育てられた女であつたことは明かである。然るに一度捕虜となつて宮古島に来るや、豈は險阻を白明井へ水没みに行き、夜は一人つらいたつとめをせねばならなかつた。彼女はこの苦境を恥辱とに堪へかねて、幾度となく歸郷を歎願したが、甲斐もなかつた。そこで其父母の郷を懐ふの情は遂に逆つて、左の詩歌を詠つた。

耳すきかや漲水
心も思たおやさけ

中屋主が美御ぼげん
やこめ親のまおぼげん

八重山乙女

古琉球

漲永も あは見て
おやさけもあは見て
白明井と通ひおら
寄合井と通ひおら
白明井やむまやる
寄合井やあぼやる
すともての井おり
明る目のかはたり
根間座や大海と
外間座や海中と
根間座を越えんか
外間座を越えんか

可憐なる八重山乙女

あばあげばつはふむ
いちよふげばなとだ
あが八重山をりんな
下八重山をりんな
雨にやちよめやめぬ
露にやちよめやめぬ
あたりごごやたらが
かなごごやたらが
井んかいろかりおり
水汲んがりかりおり
豊見親のみおぼげん
やこめ親のみたぼげん

古 琉 球

戻せふいる豊見親
歸せふいるやこめ親
何となつかしい歌ではないか。さてその意味はかうである。——かねて
噂さに聞いてゐた漲水の港よ、かねて心に畫いてゐたわやさけの港よ、中
屋の大將のた影にて、貴き大將のお影にて、漲水の港も我は見てマア、
おやさけの港も我は見てマア、白明井にぞ通ひ居る、寄合井にぞ通ひ居
る。白明井は穴深き所ぞ、寄合井は崖恐しき所ぞ、ア、妾は朝早くかゝ
る所へ行くよ、夜の明けしなにかゝる所へ行くよ、(その通ひ路なる)根
間座は青海原のやうな所ぞ、外間座は和田つ海のやうな所ぞ、根間座を
越す時には、外間座を越す時には、仰げば泣きたくなる、俯げば涙が出
る。ア、妾が八重山に居た頃には、父母の國波照間に居た頃には、雨よ
さへも濡れては見なかつた、露にさへも濡れては見なかつた、(りのやう

可憐なる八重山乙女

に) 寵兒であつたが、(うのやうに) 愛娘であつたが、(かゝる峻阻な所へ朝も夕な) 水汲まに行くとはマア、仕事しに行くとはマア、名高き大將の御情にて、貴き大將の情けにて、戻して呉れよ名高き大將、歸して呉れよ貴き大將。——なんとなつかしい歌ではないか。けれども無慈悲なる大將は耳を傾けなかつた。たゞ残酷にも海岸にある底なき石甕イシカケに水が満つたら、歸してやらうといつた。この言葉を耳にした時の乙女の心はどんなものであつたらう。宮古島の婦人社會では昔から八重山鬼虎オシロウの娘の歌と稱して悲しげな長い歌を歌つてゐるが、自分は明治四十一年の春八重山島からの歸りがけに漲水港に立寄つて、此歌の筆記を中學時代の同窓富盛寛卓君トシモリから得た。富盛君はりの細君が歌つてゐる所を筆記したのであつたが、その中から歌の本文とは、やしこをわけるに大部苦心したとのとてあつた。自分は宮古の婦人が意味のわからないのに、よく

古琉球

もこんな長い歌を記憶したものだと感心した。さてその後能く研究して見たら、このア！ゴはあの八重山乙女が歌うたのではなくて、後世宮古のア！ゴの詩人があの可憐なる乙女のことを歌うたのだといふとがわかつた。それは前のア！ゴの文体とこのア！ゴの文体との比較によつてわかつたのであるが、こゝでは精しく述べることが出来ぬ。左にその全文を掲げよう。

バが八重山ヤイマうききやや
あむまそいやたイはが
大や主オホん　うか　され
やくヤクと主オホん　たらさい
ねやんまネヤンまマさサまで
あむアムさりサリまマまで

可憐なる八重山乙女

むでどぐよるむさり
げうがやよとみヒリ
んにやかいり八重山ぎす
びやるみづのあきがと
ばなむつのなきがと
なク。なきまありゆれば
よむなよみまありゆれば
ふねがまのつきゆれば
みそがまのつきゆれば
はいよはい地間のすすた
おのふねんかいのしふる
このふねやあかうたがま

古琉球

めどむのスふねやらん
かまからごあかうたがま
めどむのスふねやク
はいよはい地間のあねた
あのふねんかいのしふる
このふねやあかうたがま
うやにのスふねやらん
かえなかみいけばと
もつなもちいけばと
そでやまたほきが
たがぎそらはなん
ばんがやよみやげればと

可憐なる八重山乙女

バが八重山ミやげればど
ばんがやのおもがげの
まへんごたちもれば

／＼／＼／＼／＼／＼／＼
／＼／＼／＼／＼／＼／＼
／＼／＼／＼／＼／＼／＼

まだ續く可き筈のものであるが、今はこれからさき覺わぬる人は殆ど
ゐないとのことである。盛に對句が使つてゐる。また充分には解せないがそ
の大体の意味はかうである。――妾が八重山にゐた時には、お母さんと一
緒に暮してゐたが、妻にするなごど大屋主にだまされて、漲水の港まで連
れて來られた、來て見ると、妻にするといふは眞赤な嘘であることがわかつた。
實際本妻はありながら、本妻にするかごといつて、妾を此處まで引張つて

古 琉 球

來た。父母の國に歸して呉れど願つたら、うれなら八重山乙女よ、この底
の無い甕に水を満たしてとろ、うれが満つたら歸してやらうといふ。さば
つて水を満たさうとするが、ごうーでも満たない。七重巻く髪毛が一重ま
く髪毛になつても。白明井に下りる時は刀の齒を越ゆるやう。ゆうらじを
越ゆる時は、大溝を越えるやう、あすやかに下りる時は、厩に行くやうそ
の様は骨折つても駄目である。大工の所にいつて、もしく大工のおぢさ
ん。此甕の底を作つて呉れ、と頼んだが、奥様それは出来ませぬから。お歸
りあさいといふ。しぶくとかへつて、漲水の渚を泣きに泣き、叫びに叫ん
で、歩くど、今しも一艘の小さな漁船が濱邊に着いた。早速走り寄つても
しく池間の兄さんたち、其船に妾を乗せていつてくれないかと頼むど、
彼等はこの船の女を乗せる船では御座らぬ、女を乗せる船は彼處から參
りまするといつて陸に上つた。今一艘の漁船が着いた。今度も亦走り寄つて

可憐なる八重山乙女

もし／＼池間の姉さんたち、その船よ妾を乗せていつて呉れと頼んだが、彼女等も貴女よ此船は女を乗せる船では御座らぬ、妾等もこの魚をかういで賣りに行かなくては、さいつてさつさつと行つて了つた。うこで泣く／＼も此處を去つて、袖山の方へ行くと、高い木があるのを幸、その頂によち登つて、わが故郷八重山の方を眺めると、わが家の傍があのあたり立つので、、、、、、、、、さといふ程の意である。富盛君はこれから後の文句の誰も覺わてゐないが、兎に角、、、、つく／＼と眺めると、老母は裁縫に餘念なく、姉は機を織りつゝ、妹よ妹よ我が妹よ、お前の何處にゐるのだ、早く歸つて妾の手傳ひをして呉れろと呼んでゐる。あはたしく手を延ばして近寄らうとほると、、、、さといふやうな意味の文句があつたさうなと語つた。これから後と讀者の想像に任すより外に道がない。口碑によれば彼女は本妻にはいちめられ、隣人には

古 琉 球

嘗られ、とう／＼袖山の高い木の上に登つたまゝ、餓死したと言ひ傳へてゐる。袖山には今に八重山墓と稱してこの可憐なる乙女の遺骨を收めた所があるとのことである。白明井の平良村の東荒野の中にある寂しい井戸で、お化けでも出さうな所である。袖山はその東南半里餘の所にゐるとのこと。自分は宮古島に上陸すると直ぐ白明井を訪つて可憐なる八重山乙女を弔うたのである。

右に述べたアーゴの詩歌としての價值はともかく、其句調や何かが萬葉のそれれ似通つてゐるのは少しく注意すべき點と思ふ。宮古島にかういふ詩歌のあるのが既に奇であるのに、和漢の文學に於て左程發達しなかつた史詩がこゝで可なり發達したのは、いよ／＼妙である。四百年前に八重山を平定した仲宗根の豊見親の生涯を歌つたアーゴの如きは（勿

論數人の手になつたといひへ。實に勇しい長篇の史詩である。八重山征伐のアーゴだけでも五十二ラインある。これはた宮古島のために特筆大書すべきことではあるまいか。アーゴは兎に角宮古島の精神的産物である。宮古島の特徴を知らうとせむる人は、ろのアーゴを一瞥すべきである。宮古嶋には此外に、多くのアーゴがある。五百年前中山王察度の勢力が始めて宮古島に及んだ頃には、宮古人は既に近隣の島々を征服して、ろの詩人は盛に凱旋のアーゴを歌つてゐた。就中アーゴの盛に歌はれたのは八重山征伐の前後であつた。沖繩の先島を野蠻島とのみ考へてゐる人は、ろの考へを訂正すべきである。

沖繩のオモロは島津氏の征伐の結果實を結ばないで枯れたが、先島の歌は立派な實を結んだ。元來詩歌は民族によりて様々であるが、宮古八重山の歌の如きと、能く人間性情の自然に發して、敢へて少しも矯揉し

かい。それ故に天真の情が自由に發露して、人心に入ること深く、且つ痛切である。況んや之を糸竹に播き、管絃に被らしむるに至つては、七花八裂、心を惹くことが夥しい。先島の住民は琉球民族の中でもわけて感情が豊かである。ろれに南國の日光、草の色、花の匂ひ、松の音、潮の香など、一として刺激の種子ならぬはない。刺激が多から想像力も亦豊かである。彼女の過去に幾多の秀逸なる詩歌の花が咲いたのも偶然ではない。そして今日の先島の住民の秀逸なる詩歌を三味線に合せて謠ひながら、一二百年前の人は能くもマアこんな詩歌が作れたといつて驚嘆するばかりである。思ふに當時の人民は大方は詩人であつたらう。しかし今日では先島の歌もオモロの如くに化石となつて了つた。

マコーレーが「何時如何して覺えたともなしに覺えて文法なども學ばない内から容易に且つ完全に話せるその方言でなければ、立派な詩歌の作

可憐なる八重山乙女

れた例が「い」と言つたのは決して陳腐の言ではないと思ふ。王朝時代の言葉を用ゐて、苦心して作つた新体詩人の作よりも、その方言を使つて容易く歌つた八重山乙女のアーゴが天真爛漫である。

先島の人を經蔑しつゝある沖繩本島の人、先島がかつて恩納ナビーよりもヨシヤーよりも一入偉い女詩人を産出したといふことを知らねばならぬ。

(四十二年一月五日稿琉球新報所載)

たうがね (宮古島の歌)

この杯サカヅキんも目差メサの親オヤ、銀ギンの花ハナのコ浮ウかハりオりヤ、あ
てがいアとらトまマち、かんがいカンガイんンけケゝル。目差メサの親オヤやウい。

是は杯に酒をつぎ人にさして是非飲んでうれと盃をさげながら謠ふ歌也。目差は役名、親は敬稱也、目差以下の士族は尊稱して親といひ以上は主と云ふ。但し以下と雖老人には主と云ふとあり。んンかカはハみミは。あてがいアとらトまマちチは注意して
た取タなナさい。かんがいカンガイんンけケゝルは考へて御飲みなさい。

歌謠に現はれたる八重山の開拓

古 慶長以後の琉球の政治家は何れも八重山島に目を付けてゐた。是れ即ち島津氏に對する自分のたひめを軽くせんが爲に、財源を八重山島に求めようとしたのである。さて或時期の間舊琉球政府の八重山開拓が着歩を進めてゐたとは左に掲げる八重山の人口増減表を一瞥したら、能くわかる。

琉球	年	代	人	口
	一六〇七	(慶長一二)	五五〇〇	
	一六五一	(慶安 四)	五二〇〇	
	一六七五	(延寶 三)	五三一六	

拓開の山重八るたれは現に謠歌

一六八四 (貞享 二)
 一七三七 (元文 二)
 一七五三 (寶曆 三)
 一七六一 (寶曆 一)
 一七七一 (明和 八)
 一七七五 (安永 四)
 一七八六 (天明 六)
 一七九一 (寛政 三)
 一七九八 (寛政 一〇)
 一八〇三 (享和 三)
 一八一〇 (文化 七)
 一八一八 (文政 二)

六二八七
 一九三五二
 二六二八五
 二六七九二
 二七二四二
 一八一一九
 一六〇七五
 一六五三八
 一五九五七
 一五八五八
 一五五三三
 一五二五三

古 琉 球

一八二四 (文政 七)
 一八三四 (天保 五)
 一八四四 (弘化 二)
 一八五一 (嘉永 四)
 一八五四 (安政 二)
 一八六二 (文久 三)
 一八七三 (明治 六)
 一八九三 (明治 二六)
 一八九七 (明治 三〇)
 一九〇二 (明治 三五)

一四〇九一
 一四五九一
 一二七五八
 一三三八三
 一一二一六
 一一三二四
 一一九二六
 一五一〇〇
 一六二〇〇
 一六九〇〇

不精密な統計ではあるが、之で大体は窺はれると思ふ。此表によると、島津氏の琉球入の頃には八重山の人口は五千百しかなかつたことがわか

る。それから七八十年の間は大した増減もなかつたが、元文年間に一躍して一萬九千三百五十二人となり、明和年間には二萬七千二百四十三人に達してゐる。さうして俄に減少して一萬八千百十九人となり、漸次減少して明治に至つたのである。今試に八重山の記録を調べて見ると、その一低一昂の理由が略ぼ明かになる。記録の語る所によれば、琉球入の後、暫らくの間は大和在番と稱して薩摩の役人が九年交代で八重山に滞在したることであるから、島津の方でも八重山といふ沃土には夙に目を付けてゐたことがわかる。琉球の方では正徳年間から寶暦年間にかけてこの有病地を開拓して數個の新村を建てた。これ皆蔡温の治世中に起つたことである。試みに、新村建設の二三の例を擧げてみると、正徳三年には波照間の方から三百餘人を石垣島に移して白保村を建てた。享保十七年には黒島の人民四百餘人を石垣島の川平村の属地野底に移して野底

古 琉 球

村を建てた。全十九年には波照間から四百餘人を西表島の古見の南風見野に移して南風見村を建てた。文久三年には石垣登能城二ヶ村の人民五百五十三人を於茂登嶽の麓なる名蔵村に移し、名蔵村の人民八十七人を合せて六百人となして一ヶ村を建てた。寶暦五年には波照間の人民二百八十餘人を西表に移し、西表古見二村の間の崎山といふ所に鹿川網取を基礎として崎山村を建てた。その外にも多くの新村を建てた。建てる毎に石垣島の無病地やりの附近の島々から強制的に人民を移住させたのである。はつきりしたとはいへないが貞享三年から元文二年に至る五十一年間に一萬三千人も増加したのを見ると、沖繩本島からも移住民があつたではなからうかと疑はれる。

ごんかつまらかい所でも故郷はごうるはしい所は無い。このうるはしい故郷を離れて恐ろしい有病地へ赴く移住民の心はごんなものであつた

拓開の山重入るたれは現に謠歌

らう。實に專制政府の役人の目には八重山の人民は牛馬よりも少し位優つたものさしか見えなかつたであらう。八重山の崎山ぶしはこの移住民の一人がその故郷の空を望んで歌うた歌でゐる。

崎山の新村よ建てたろ

誰の主のづれの親の建てたねい

波照間の下八重山のうちから

何の故如何の因んど建てたねい

興那國口のばま口の故んど

許しやひりきもちやひり主の前

許すこときもちやことからぬそ

がん心きも心あらぬろ

天の御意御主のおいまやればど

古琉球

天の雨よまの粒やればど

笠ばとり蓑ばとりばんさり

誰と誰づれとづれで思たら

我と我是と是分げられい

女どな六よべふか入る分げられい

よこひ辻あろびはな登りて

波照間よ生れ島よみやげれば

我家の母の産しやる親の眞面見るらんねい

見らですば涙まり見らるな

取らでば遠さのけいとらるな

泣くくよもくと戻り來

居りな居り暮つな暮ち見るたら

拓開の山重入るたれは現に謠歌

居る島と暮つ組ごましやる
の意味はかうである。——崎山の新村を建てた人は誰であらう。波照間の内から（吾々を連れて来て）何故之を建てたのだらう。與那國口といふ港があるからだ。吾々は此處に来るのがいやで、どうか許して貰ひたいと歎願して見たが、御役人様はそれには自分がやつたところでなくて、國王の御命令だと仰つしやる。天の雨や夜の露なら笠を被り、箆を着たら防ぐとも出来ようが、國王の御命令とあれば、致方がない、さて誰と誰が選ばれるかと思つたら、是れ是れの人が撰ばれた。すなはち女が六十人に男が八十人選ばれた。ゆこひ、辻やあそびはな（地名）に登つて、我が父母の國波照間の方を眺めると、生みの母がまのあたり見ゆる心地がする。顔を向けて見ようとする、涙が出て見なくなる。手を延ばして取らんやうとすると、遠くて届かぬ。泣きま泣いて　まぶくとかり

古　琉　球

住まひに歸つて来た。ところが居て暮して見ると、この島のこの邊がいつしか面白くなつた。——新村の移住民が漸次その境遇に馴れてくる状を寫したのである。このあたりマラリヤの烈しい所ではあるが、その風光は一入絶佳である。次々川平村の野底に移された黒島生れの若者が故郷なる戀人を懐うて歌うた久場山越路節を見てみよう。

黒島に居るけい
先島に居るけい
島一つやりをり
里一つやりをり
芋なびいんば二人
よいふきんば二人
山行きんばふたり

拓開の山重入るたれは現に謠歌

磯おりんばふたり
 たらと、みで思だら
 わんと、みで思だら
 別れ欲しや無いぬろの
 ぬき欲しやこれ無いぬろの
 沖繩から美聲
 美御前から御差圖
 島別れで言うられ
 組別れで言うられ
 なくくくと分けられ
 よもくくと分けられ
 とばらまや生き苦れーや

古 琉 球

野の底に分けられ
 かあしやまや居り苦れしや
 黒島に残され
 黒島に居た時には、先島に居た時には、同じ島に居たので、同じ里に居たので、芋をうむも二人、よあべをするにも二人、山へ行くにも二人、磯へ行くにも二人。(どこまでも一緒だと思つてゐたが)別れたくもないのに、離れたくないのに、沖繩の方から御命令があつて、島を離れ組を別れて移住しろとのとで、泣くくもいやくながらも離別する事になつた。私は野底に来てわびしく暮してゐる。吾が思ふ人は黒島に留つて寂しく暮してゐる……このやうに歎聲をもらしたのは獨りこの若者ばかりでは無かつたのであらう。世に政治家程残酷な者は居まい。次には船越節。

拓開の山重八るたれは現に謠歌

伊原間よ建てたそ
 船越よ建てたそ
 誰の主の建てたそ
 づれの主の建てたそ
 たんの主の建てたそ
 みづんびらまのたてたそ
 おんの主や頭やあらぬ
 みづんびらまや目差やあらぬ
 をりなうさみればご
 たつおたちいくけご
 伊原間ごさねしやる
 舟越ごさねしやる

古 琉 球

おんの主や頭やなり給うれ
 みづんびらまや目差やなり給うれ
 伊原間の船越は誰が建てたのだらう。今のミヅンの君といふ役人が建てたのだ（こんなひどい所に吾々を引張つて来て）あのミヅンの君と人の上に立つ可き人ではないぞ。けれども居つけ見ると、この伊原間の船越も面白い所だ。ミヅンの君こそは人の上に立つ可き人だぞ。――八重山人が死ぬとを平久保へ行くといひ、死にそこなふとを船越へ行つ、来たど云ふ位であるから、船越の邊は風土病の盛んな所だといふことがわかる。併し住めば都で、人間はごういふ所にも住めば住めないとはない。初にミヅンピラマを罵詈雑言した連中も後には之を謳歌するようになった。最後には名譽節といふ面白い歌を紹介せう。

川良山の上なか

拓開の山重入るたれは現に謠歌

白雲の立ちもらば

白雲で思ゆか

ぬり雲で思ゆな

とばしやまでは思ゆれ

かかしやまではたもゆれ

川良山の無いぬらば

山道の無いぬらば

川良山や手巾なげ

山道や布なげ

心のだま思から

山道もかなしやごある

川良山の上に、白雲がたかびいたら、白雲と思つて呉れるな、お前の可

古 疏 球

愛い妻を思つて呉れ、わが通路に川良山の峽路がなければよいが。と言つても川良山の峽路は手ぬぐひの長さ位のものだよ、思ふ心だに切であつたら、山道位は有る方が却つて面白い。——實に面白い歌ではないか。四ヶから名藏の開懸地に行くには川良山と云ふ一里位の峽路を通過せねばならぬ。こゝには四時熱帯の花が咲き乱れて、木の葉、蝶、やつま、べにや八重山、文字、さごの美しい蝶々が飛んでゐる、二百年前には狩人の外と誰も通らなかつたところであるが、石垣登能城の一部の人民が名藏に移されて以來、若い男女が此山道からしのぶやうにあつたところである。その後元文二年に此道を開いて間道にした。以上あげた歌の外にも當時を研究すべき資料になる歌は澤山あるが、これ位にして置く。兎に角舊琉球政府はかゝい風にも多くの男女を犠牲にして有病地を開拓したのである。成程最初の間人間は自然に負けてゐたが、暫らくの後人間は

自然に打勝つて、幾多の新村は人口の増加を見たのである。これらの新設の村が盛になつてゐたことは、その住民が美しい歌を澤山遺してゐるのでもわかる。所が琉球政府のこの大計畫は、明和八年の大海嘯のために悉く水泡に歸した。當時八重山から首里政府に報告した古文書によると、この時の海嘯は石垣島の東南からやつて来て、殆んど島の半分を洗ひ、役人八十九人、人民九千四百餘人、其他牛馬船舶などをさらつていつたのである。もよからの村落の勿論新設の村落も大方破壊された。そこで再び波照間や其他の島々から大勢の人間をつれて来て、そのうめ、は、せをやつたが、駄目であつた。たゞまに四年経つて安永五年の二月に疫病と飢饉が一緒にやつて来て、全七年の二月まで猖獗を極め、三千七百三十六人の人がその犠牲さかつた。その後享和（一八〇三）天保（一八三四）嘉永（一八五三）に「麻疹疫癘」が流行して八重山の人口は著しく減少した。久しく壓倒され

てゐた自然は再び勢力を回復し、風土病といふ別働隊を遣はして新村の人民を苦しめた。それに人頭税はかゝる、役人は食ると来てゐるからたまらない。その負擔を軽くせん爲に方々で流産や赤子殺しが行はれた。政府は令を發して嚴しく取締つたが、止めることが出来なかつた。そこで子供が五名出来たら両親は免税にするといふことにしたが、それでも止めることが出来なかつた。野底仲間野原等の村は廢村になつた。そして現に廢村にありかけてゐる村も多い。かうなつて八重山の人民は最早歌などを作る餘裕は無い。明治になつて一時租税が軽くなつたり、首里那覇の人が移住したりした爲に、人口は段々増してゐるが、まだ昔のやうで無い。大海嘯以來の傷はなほ癒えない。誰が何んといつても昔の八重山と今の八重山よりは進んでゐた。島廳まで設けて色々のことをやつて居るにも拘はらず、西表島が無人の境になりつゝゐるのは昭代の

拓開の山重八るたれは現に謠歌

大限事といはなければからぬ。もし之をアメリカ人にでも賣り飛ばし
たら、この風光の明媚なる西表島は忽ちよして香港のやうな所にかるで
あらう。そして、石の屏風の邊は立派なる遊樂地になるであらう。(四十二
年一月一日稿沖繩新聞所載)

三言

石の屏風 (八重山島の歌三首)

石の屏風立て、七重八重うち何時よまで舟浮彌勒世界報
舟浮久葉てまや枝持ちの美さ舟浮乙女の身持ち美さ
舟浮乙女のお情の煙草心に吹染めて伽にしやべら

八重山島の歌 鶯

古 琉 球
大福ここの根ざしに
なりあここの本ばいに
一の枝ふみのほり
七の枝ふみのほり
一びらい葉ばかけ
七びらい葉はがけ
一びらい卵産し
七びらいこがなし
一びらい卵から

八重山島の鶯歌

七びらいこがから
 綾羽ば産しやうり
 びる羽ばなしやうり
 正月の朝ばな
 元日のまともて
 東かい飛びつき
 日ばかめ舞ひつき
 いらさにしやけふの日
 ござさにしや黄金日
 萬すでる今日だら
 羽もゑるたきだら
 けふ祝ひしゆらば

古琉球

明日祝ひしゆらば

これは歡喜と希望を歌うた南國の象徴詩である。沖繩群島の歌の中でこれ程美しい歌は無い。ちよつと翻譯は出來かねるが、大体の意味はかうである。——大きいあここの木の根差に、高いあここの木の下延に、(威勢のよい鶯が)一の枝を踏み登り、七の枝を踏み登り、一の巢を構ひ七つの卵を構ひ、二つの卵を生み、七つの卵を生み、二つの卵から七つの卵から、美しい羽の雛を孵へして、滑かな羽の雛を孵へして、正月のつとめて、元旦の朝まだし、東の方に飛んで行つた、旭の方に舞つて行つた、喜ばしい哉今日の日、嬉しい哉黄金の日、萬物を得たる今日、羽の生えたる嬉しさよ、今日の日を賀せずや、明日の日を祝せずや。——ナシト美しい歌ではないか、鳥類の中で最も勢のよい鶯の雛が、而も正月の元旦の早朝に、旭の方に向つて勇ましく飛躍を試みるの狀を歌うた

のである。もく／＼これは八重山の人のごういふ日にごういふ喜びを歌うた歌であらう。昔から八重山の女に取つては、上布を藏元（役所）に納める日は容易ならぬ日であつた。数ヶ月の間、汗を流して織りなした上布が検査に通るか通らぬかの際でゐるから、この日、彼女等は近所の者と連れ立つて、道々布晒節といふ嬉しいやうな悲しいやうな調子の歌をうたつて、藏元へ出かけるのである。検査に通つた連中はこの「ばしのさり」節をうたつて、鶯の雛が始めて飛立つたやうに、躍つて歸るのである。自分は八重山にいつた時、この歌の合奏を聴いて、一種の感に打たれた。（四十二年一月一日稿、沖繩毎日新聞所載）

八重山童謡集の序

岩崎君が『八重山童謡集』を出版すると聞いて、私は端かくも三年前八重山に遊んだことを想出した。八重山は宛然ホーマーのユリセスの中に書いてあるセースの島のやうな所だ。島の音楽には暫時立寄つた旅人を永久に囚へる魔力がある、其無名の詩人はかつて「ばしのさり」といふ調の高い立派な象徴詩をさへ歌つた。八重山は實に歌の國だ。私は今でもこのうるさい沖繩島を去つて、島のうるはしい歌の國に一生を送りたいと思ふ位だ。しかし物質的文明は其處にも侵入していつて、南國の詩人の種子を絶やさうとしてゐる。そして今はただ好奇心に富んだ幼な子の詩人たちが、島の美しい自然を見て歌ひつゝ、躍り喜ぶのみだ。岩崎

君がこの際無邪氣な幼な子たちの歌つてゐる歌を集めたので、能く其時を得てゐる。これから十年も経つて八重山島を訪づれる人は、かういふ美しい歌を幼な子の口から聞かないでこの昔から學ぶで好らう。(四十二年十一月廿七日)

三〇

八重山の童謡三首

東カラアールオール大ムスンガニ、沖繩ン八重山照シヨール。

(東から上り給ふ御月様、沖繩も八重山も照し給へ)

東カラアールオール大月、我家ヌ頂マデ照シヨール。

(東から上り給ふな月様、我家の頂までも照し給へ)

アン丈ナ一ヌ月夜、我等諸共遊オーラ

(こんな美しい月夜に私達一諸も遊びませう)

琉球語の掛結に就いて

日本語で通常文を結ぶには活用言の終止法を用ゐるが、其上に来る尾附波の種類よりては、此結法を一變することがある。此等を稱して掛結といふのである。本居宣長翁の廻鏡には之を三條の大綱に分ちて、

(右) は、も、徒、の結

(中) そ、の、や、何、の結

(左) こ、そ、の結

としてある。そして尋常の結法は終止法を用ゐるが、か、ん、や、か、の結法は連體法を用ゐる。こ、そ、の結法は已然法を用ゐるといふことは人の能く知る所である。しかしこの語法が南方の姉妹語なる琉球語に於て、今尙

忠實に保存されてゐるといふとは餘り人の知らない所であらう。私はこゝに琉球語の掛結に就いて簡単に述べてみようと思ふ。

(一) 尋常の結法

は現今の口語では、や、が、の如き主格をあらはす^ク尾^ハ波^ハを受けて終止法で結ぶ。試に「ト言フ語ガアル」といふとを四つの方言で比較すると

沖繩語	ndi	iru	hanashi	nu	an.
六島語	chin	hanashi	nu	ari.	
八重山語	di	anlu	panasu	nu	an.
宮古語	ti	alu	panasu	nu	an.

百數十年前に出來た組踊「花賣の縁」中にゐる口語を見ても 今日のこと別にかはつたことはない。

nda	nde	yudi	kurachi	wayabitan.
-----	-----	------	---------	------------

更に十三世紀の中葉に溯つて、英祖王を謳うたオモロを見ても略同様であることがわかる。

いちへきいくさもい なつはしけちもる ふよはたさけもる

もるは今日の口語では mayua といふべき所であるが、六百年前の琉球語の終止法は矢張日本の文語のそれと同一の形であつたのである。

(二) du の結法

に就いてはチエムブレン氏もどうにうの著 Essay in Aid of a

Grammar and Dictionary of the Luchuan Language. (琉球文

法)の中に書いてゐる。此の (du) は日本語の^カと^ハ同^ハ互^ハ爾^ハ波^ハで、その掛の下を連體法で結ぶ所^カも、能く日本語のご似通つてゐる。さてこの語法の日本語ではどうも廢れて了つたが、琉球語では今尙忠實に保存されてゐる。試に又「ト言フ語ガアル」といふとを四つの方言で比較して

琉球語の掛結に就いて

みよう。

沖繩語	ndi	han	hanashi	nu	du	aru
大島語	chin		hanashi	nu	du	aru
八重山語	hi	anku	panasu	nu	du	aru
宮古語	hi	au	panasu	nu	du	aru

この法則の如何なる動詞の場合でも例外はない。例へば、八重山の方言の *idi ran* (出づの終止法) は連體法の時には *idi* となり、*nitran* (落つ終止法) と連體法の時には *idi* となる。さうすると、「我は出づ」といふことは *ba- idiran* で、「我ぞ出づる」といふとは *ba-du idi* であることは言ふまでもない。之を與那國島の方言に就いて調べても同一なる現象が見られる。

琉球語

ndi	ndu	hanashi	nu	an
ndi	ndu	hanashi	nu	du an

この通りあらゆる大方言に就いて見ても亦同様である。琉球群島何れの小島に於ても、平安朝の語法のままのものが遺つてゐるのは實に面白いとである。それは倍置き、百数十年前の脚本の中にこの例を求めて見る

朝夕波風の音を聞きぬる。(花賣の縁)

中々にぎやかか所だやべる。(全上)

我が松ぞやゆるが我が非ぞやゆる。(銘苅子)

といふ様になつてゐる。今日の口語と殆んど大差がない。又連體法で結ぶ代り、さらさらめで結ぶとがある

袖の振谷ぞ御縁さらめ

今日の口語にも

An du yasami

といふのがある。これは An du yau に samu を加へて力を強めたの

である。又銘苅子に

世界のよせごとや誰がしちやがはじめ、天のお定めど世界の習ひ。

の様に體言で止めた所もある。こゝにはトナツタノデアルといふ意味の

語が略してゐる。更に溯つて、ご (E) の結法をオモロによりく研究し

てみると、

ちやなもい (五百八十年前始メテ支那ニ通ゼシ中山王察度ノコト) が、

ちあふへばる (地名) のぼて (登ツテ) けやげたる (踏ンダ) 露は露

からごかばしやる (露ハ露サヘモ香シ)

いみやご (今ゾ) かみしむ (上下) とよむ 謳歌スル) とも、すえ (チ

年モ (これご) (コレゾ) いちね (言ウテ) とよむ (謳ふ)

みちご (見テゾ) うらやまよる (ウラヤム) きちへご (聞キテゾ) ち

らやむる (羨ム)

まただご (太陽ゾ) てりよる (照ル)

あまみや (アマミノ王家ガ) はぢまたる (ハジマツタ即チ建設サレタ)

しよりもりくはく (首里嶽城) これご (コレゾ) こかねうちに (黄金

ノウチナニ) たどはる (譬ハレル)

けた (今日) ふきよる (吹ク) 風や (風ハ) ごとく風ご (毒風ゾ) ふきよる

(吹クナル)

ご (E) の係りは何れも下を連體法で結んであるとがわかる。今この掛

結の起原に就いて私見を述べる前に便宜上外の事をいふ必要がある。

琉球語で cha shu ga (どうするか) といふことばの疑問の意を

強く響る爲に *ga* を *cha-* の次に持つて来て、*cha-ga shura?* の風にする。また他の例を擧げて見る。 *Ta-ga hajimita-ga?* の次を持つて来て、*Ta-ga ga hajimitar?* の次は何れも *ga* の終りになる動調の「下略法」(チエムブレン氏の所謂)の下に *ga* を加ふる。この *ga* はらむの如く未來を推測する助動調であつて、之が *ga* を疑の意が一層深くなる。この倒置法は琉球語の凡ての方言に於て見出すことが出来る。こゝには宮古島の例の *ga* を擧げる。 *nza-nka? nmya-malu-ga?* (ツノ入らつしやいすか) *ga* が倒置される時は *nza-nka-ga nmya-malu-naru* (これは日本の古い語法(何處へぞ行き給ふ)に二入近心)と思ふ。この外形容調の場合もかういふことがある。例へば

nu-churasa-ga? の *ga* が倒置されて *nu-nu-ga-churasa?*

となる。

(*de*) も *ga* と同様に古くは動詞或は形容詞の下にあつて、日本語の *ga* のやうなものであつたが、いつしか倒置せられて逆體の掛となつたのである。日本語に於ても *ga* の掛結の起源は語句の倒置にあるとの説もあるから、これも強ち無理なる臆測ではなからう。思ふに今日の *nakan-aiwa-du-kivyau?* といふ様な形は「泣かなれば災ゆんだう」(銘子)といふ様な形から來たのであらう。今日の琉球語では「何々」*ga* といふ形を除く用ひが古くは能く用ゐたのである。三百八九十年前の宮古島の歌にも「ねまさや大海 *ga*」外間座やと海中 *ga*」といふのがある今日の口語でも *kunu-hya-do-nusudo?* といふ方が力が強いやうだ。兎に角掛結の

原因は語句の例置にあるといふところから推測することが出来ると思ふ。 (三) に就いてはまだ述べたいことがあるが、それらは他日に譲ることとして、こゝには (三) と用ゐる様によりてと日本語のそよりも力が強く、場合によつてはこゝそと同一位の力を有するところがあるといふことだけを述べてみよう。

天の群星や皆が上ご照ゆる黄金三つ星や我上ご照ゆる。 (四)

といふ歌の場合にははじの照ゆるは終正法ではなくて、照ルがといふ程の意を有してゐる。この場合とはこゝそと同一力を有する。

(三) す、しよ、じよの結法

これはチエムブレン氏が一種不可解の韻文としてヒを投げたわもろさうしの中から私が発見したところのものである。この三つの巨爾波は何れも同意義で、日本語の巨爾波こゝりに相當するものである。此はオモロ

に於てのみ見ることが出来るもので現今琉球の何れの方言に於ても、見ることが出来ない。その用方を能く研究して見ると、大方三種の部類に分けることが出来る。

第一類

あまみきよ(琉球開闢ノ神)がうざし(神託又ハ命令)しよ(コソ)この大しま(コノ大島ニ)おれたれ(下リタレバ)とも、すゑ(千年も)たぎやかもい(尙眞王)す(コソ)ちよわれ(チガラヘカシ)

さまがなしさまの(尊キ君ナル)あち(按司)す(コソ)しりよわめ(治メ給メバ)かみじも(上下ヲ)おそて(襲ツテ)かなわしよわれ(平ゲ給ヘ)かなぐすく大ころ(金城ノモノ、フ)大ころがつかい(モノ、フノ使)しよ(コソ)この大岩ま(コノ大島ニ)たれたれ(下リタレバ)でわん(イザ我レ)あすば(遊バム)かま(神々)

こ(船ノ)かよはぎやめ(通フ所マデ)あちおろい(ワガ王)しは(コソ)
 世しりよわれ(國ヲシロシメセ)
 天ニ(天ニ)てる 照ル(ほし)星ヲ(しよ)コソ(ほし)星ヲ(しよ)コ
 ソ(さ)にしよわれ(算ヘヨ)
 のはれかあし(アハレ算キ)きみはる(君向風ヨ)くまら(國前チヲ)
 し(す)ラコソ(もどりよわめ)歸り給へ)
 大ぬし(まぶれ)守レ(わかぬし)まぶれ。
 あんじおとい(とも)はるちよわれ(國王萬歳)
 此又(はし)は多く名詞に入りて下なる命令法に應ずるものである。琉
 球語の唯一の僻語「混効驗集」を按ずるに、すは「言葉の結也所により
 心替也。てるかはす世のむすびつけれせ。さうすれがうすれといふ心
 か」である。又同書にたりし。たに、こを解して、「二つ共されば」

そ云心」とある。百九十年前に此しよ。又はすを。互爾こそ。解したことが
 わかる。又こをこの意に解したこともわかる。これはこの原義を事
 又は物の意に解せられた金澤博士の説と符合してある。さて琉球語の
 verbal noun (動詞の名詞形)の語尾の *mu* には元來 *コト* 又は *モノ* と
 いふ意味があるが、丘爾波の *tu* 又は *しよ* にも *モノ* 事又は物の意があつ
 たのではなからうか。吾々琉球人には *tu* *si* *ga* *nashi* 又は *tu* *si* *ga*
se *nashi* といふ言葉がいつも「取ルコソケレ」といふ意味に解せ
 られてならない。こへらは餘程研究すべき所である。
 すしよの文献にあられた最古として而も最確實なるものを求むれ
 ば、五百三十年前の察度王を謳うたオモロである。降つては二百年前の
 尙永王を謳うたオモロである。兎に角支那に通じてから島津氏の琉球征
 伐まで凡る二百年間のものに多い。而して初めには最多くあらはれ、後

琉球語の掛結に就いて

に漸く減じてゐる。三百八十年前の金石文に於てさへ見出すことが出来ないのである。こと後世に至つては韻文に於てのみ用ゐられたのであらう。そしてその口語に用ゐられた時代は最古のものであらう。オモロの中には、と掛けて終止法で結んだものもあり、と掛けて已然法で結んだものもあるから、古くはその用法がまら／＼であつたが、後に至つては一定の法則を生じたといふことがわかる。そして數世記の間にその掛結勢力を失ひ、との掛結が之に代つたのである。しかしその掛結は形に於てこそ廢滅したれ、のの意味に於ては今も殘留してゐるのである。このは今日の口語では副詞句となつて、形體を留めてゐると思ふ。

Danju ka (誠に) といふことばがこれである。又歌にも、

名護の番所だんじよとよまれる云々

といふのがある。オモロには

琉球語

だりじよとよまわれ (或はだにすとよまわれ)

といふ様にだりじよ又はだにすの形になつてゐる。(御真人のまぎれ誠にまゝと決れとかこれと誠に眞王やれとかいふものがある) もとは誠に、その意を有してゐたが、いつしか副詞句となつてダンジュカとなつて一語のやうにかつたのである。

萬葉集などを讀んで見ると、この掛結は古くは一定しかかつた様である。で掛けて已然法で結び、こそで掛けて終止法で結んだ例などもあつて、初めの程は一定しなかつたが、平安朝に至つて掛結の法則が立派に出来上つた様である。殆ど同時代に於て、琉球語にも同様な現象が起つたといふとは決して偶然なる出来事ではあるまい。日本語と琉球語とはかく些細を點まで一致してゐるのである。これは民族心理の上から大に研究すべき問題と思ふ (四十三年九月十五日稿、沖繩教育所載)

P 音 考

三九

日本語に於て、ハ行の子音は古くから今日のやうにh音であつたか、はた又p音^{pp}がその古音であつたか、といふ問題はかつて學者間に論議されたことがあるが、私はこゝに琉球語のp音に就いて卑見を述べて、世の音韻學者の参考に供しようと思ふ。しかし茲に當然起る可き先解問題は琉球種族の日本人種に對する關係如何といふとである。もし二者の間に何等人種學的の關係がないとしたら、大島正健氏が言はれた通り、琉球語の例は日本語を解釋するに何等の力にもなるまい。ところが二者の間の人種學的關係が至つて密接であるといふことになつてゐる今日では、琉球語の例も亦日本語の問題を解決するに與つて力があるのである。「琉球

人の祖先に就いて」(参照)

琉球に於ては、四百年以前の古記録は全く傳はらないから、その古音を研究するとは至つて困難である、よし三百七八十年前に編纂されたおもろたさうしがあるとしても、清濁を區別すべき、シルシが附けてないからパピプベボなどの音を研究するとは出来まい。幸よ清人徐葆光の中山傳信録及び英人ペーシルホルルの日記にのつてゐる琉球語の見本や、各島々で使はれてゐる方言があるのので、上古における音韻の組織が如何なるものであつたか、それが時と處によつて、如何に變化したかといふもの研究に好都合になつてゐる。

こゝろみに首里、國頭郡、宮古島、八重山島、奄美大島の五方言に於けるpやドやHの音を有する單語の對表を掲げて参考に供しようと思ふ。

	首	里	國	頭	八	重	山	宮	古	大	島
葉	fa- ^フ	fa-	pa-	pa	pa-	pa-	pa-	pa-	fa-		
墓	faka ^フ haka ^カ	paka	paka	paka	paka	paka	paka	paka	haka		
蝶	habetu	fabetu	habetu	pabira	pabil	habera	habera	habera			
羽	fani ^フ hani ^ニ	pani	pani	iani	pani	hani	hani	hani			
留	hataki	pataki	pataki	fataki	pataki	hatahe	hatahe	hatahe			
寮	faru ^フ haru ^ル	paru	paru	faru	faru	haru	haru	haru			
柱	haya	paya	paya	para	para	harya	harya	harya			
蛇	habu	pawu	pawu	pabu	pawu	habu	habu	habu			
花	hana	pana	pana	pana	pana	hana	hana	hana			
火	fi	pi	pi	psi	(umatsu)	(umatsu)	(umatsu)	(umatsu)			
H	fi	pi	pi	pi	psi	hi, hyuru	hi, hyuru	hi, hyuru			

MK0

人	fitu ^フ chu ^{チュ}	chu	psitu	psitu	psitu	psitu	psitu	psitu	psitu	psitu	psitu
葦	firu	piru	piru	piru	psiru	psiru	psiru	psiru	psiru	psiru	psiru
足	fisha ^フ	pisha	pan	pan	pigi	hagi	hagi	hagi			
筭	fudi	pudi	fudi	fudi	fudi	fudi	fudi	fudi			
勝	fusu	pusu	pusu	pusu	pusu	pusu	pusu	pusu			
帆	fu	pu	pu	pu	pu	fu	fu	fu			
深	fukasa	pukasa	fukasa	fukasa	fukasa	fukasa	fukasa	fukasa			
速	fesa	pesa	paissa	paissa	payasa	fesa	fesa	fesa			

以上の例は僅なものではあるが、これによつて、その一般は推されることが思ふ。今試に P F H 音分布の地図を製して、この島々の歴史的関係と對照して見たら、その變遷の過程が容易く推測される。

琉球群島の住民は元來同一の人情風俗宗教言語を有してゐた故、容易

MK1

考音 P
 く統一せらるゝに至つたのである。ところが六百年前まではこれらの人民は何れもその近隣に自分等の同胞があるといふとを能く知らなかつた位である。十三世紀の末葉から十五世紀の中葉に至る百数十年の間に琉球群島統一の基礎が成ると、當時琉球王國の首府なる首里の内裏言葉はいつしか琉球群島の公用語となつて、其あらゆる方言に大なる影響を及ぼした。それから慶長十四年以來は、奄美大島は薩摩の直割となつたので、早く日本化し、沖繩も亦凡ての点に於て日本の影響を受けたが、交通の不便な國頭地方及び宮古八重山は餘り日本化されないで、昔ながらの言語と風俗とを保存してゐる。右に掲げた方言の比較は能くこの邊の消息を語つてゐる。なほ細しく言へば、首里及び大島の方言に於ては、十中の七八は「音」(フ、フ、フ、フ)であつて、漸次「音」(ハ、ヒ、ヘ、ホ)に遷るの傾向を有し、國頭及び宮古八重山の方言に於ては、「音」(バ、

右 琉 球
 プ、ベ、ポ)であつて、漸次「音」に遷るの傾向を現はしてゐる。就中「音」を多く使用するは國頭地方であつて、この地方の人は「音」を發音するを難しとする。彼等は喉音の「音」を有つてゐるが、これは寧ろ「音」に近い性質のものであるから、彼等は外來の「音」を「音」に替へて發音するのである。(宮古に於て兩唇「音」の外に齒唇音の「音」があるのは少しく注意すべき所である。)沖繩に於ては少し年取つた人や發音に注意する人は「音」よりも「音」を可いとしてゐる。百年前に琉球を訪れたベール、ホール、の日記中にゐる琉球の單語を見ると、當時那覇では「音」から「音」に移りつゝ、あつたといふとがわかる。又百九十年前に琉球に使した清人徐葆光が中山傳信録に收めてある琉球の單語を調べて見ると、

晴、
 法力的
 下雨、
 阿梅福的

考音P

禪子	鼻	花	八	冬	南	鬚	筆	初二	左	星
哈加馬	裕納	裕那	賭之	灰暗	灰	以上は兩唇音F	夫的	福子介	分搭里	夫矢

古琉球

以上は喉音H。

鷲 皮羅
 寒 辟角羅煞
 羊 皮着
 貧(人) 平素奴周
 鹹 什布喀羅煞

以上は破裂的兩唇音P。これは今日でもfであつてhではない。
 i (イ) e (エ) の前に來るFは今日でも普通のFとは異なつて、
 多少破裂音の氣味があくから、二百年前にはこれは純粹の破裂音
 Pであつたかも知れない。

琉球語に於ては *mpa* (御鼻) *mpa* (御齒) のやうに、鼻音の次には
 能くP音が保存されるのであるが、中よは

supuyun (吸フ) shupukarasa (鹹)

考 永く保存されたのであらう。吾々はこの面白い例に依つて日本語の吸フ
又はシ、ホ、カ、ラ、シ、がかつて supu 又は shokarashi と發音された
時代があつたと推測し、更に溯つて su 又は shupkarashi と
發音された時代があつたと推測する事が出来る。又日本語の大(オホ)
といふ言葉は沖繩語では Ei で、國頭の方言では Ei であるが、これ亦
その移變りの三階段を示してゐるものと見て差支はかゝい。

兎に角琉球語に於ては $\text{p} \rightarrow \text{F} \rightarrow \text{w}$ h といふやうに變化して今
日に至つたのであらう。しかしこの音韻變化を自發的に起つたものでは
なく、近畿地方を中心として起つた音韻變化の影響を受けたものであ

古 琉 球

る。日本語に於けるこの音韻變化の有様を見るに、上古の P 音 (六行)
は七世紀(推古朝)以前に於て次第に F 音 (フア行) に移り、F 音は十五六
世紀(足利の末)に至り h 音 (ハ行) に移るの傾向を現はし、十六七世
紀(徳川の初)に至り f 音は大方 h 音にかはつてゐたことは今日學者間の
定論になつてゐる。(今でも f 音フア行は殆ど h 音ハ行にかはつて了つた
がなほフのみは昔のまゝで遺つてゐる。)さうして近畿を中心として起つ
たこの音韻變化は漸次傳播して全國に及び、その餘波はいつしか南方の
班にも及んだのである。思ふに七世紀の末所謂南島人が大和の朝廷に
朝貢した頃には彼等は皆今日の國頭の山地の人の如く盛に P 音 (六行) を
使用してゐたのであらう。室町時代以後琉球と内地との交通が頻繁とな
つたので日本文學は漸次琉球の上流社會に行はれる様になつたとは、オ
モロや金石文などの言葉の日本化されたのを見てわかる。それから慶

長以後琉球語が著しく日本語の影響を受けたと十八世紀の初頃に出來た琉球古語の辭書混効、驗集の序文を見てもわかる。

考 音 p

昔は(中略)みせゝるの言葉を俗語とするが故に優にして美盡せり然りとはいへども世遠くしてや、減少するが故に尙貞尊君敬慮あさからぬ事被思召言葉を撰べとの宜旨を下し給へども果してしるものゝし尙賢尊君御宇下つかた三代に使奉る一人の官女あり遺俗流風の言粗覺えられしを集神調歌の詞を撰且古老の口碑を聞て都て冊となすもの也

一世紀も経たぬ内に琉球の社會が一大變動をなしたとがわかる。當時の人は九十一年前の内裏言葉で書かれたよう、これのひのもん(尙寧王の墓碑)やたもろの言葉をみせゝるの言葉(古代の言葉)として研究するやうになつてゐた。當時琉球に於てf音(フア行)がh音(ハ行)にかはり

音 琉 球

つゝあつたとは明かである。しかし日本文化の影響を蒙るよの少い山地や嶼嶼に今なほp音(バ行)が盛につかはれてゐる。これも亦天然が時間場所にはして吾々に示してゐる一例である。このp音の研究は他の方面の研究と共に琉球群島の住民が天孫人種と共にまだ九州の地にかぞ、盛まp音(バ行)をつかつてゐた頃に分岐して來たを推測せしめるのである。二琉球人の祖先に就いて(參照)さうして出雲や奥羽の人が吾々琉球人の如く今なほf音(フア行)をつかつゐる。之實に面白い例ではないか。

さて以上述べたまで琉球語でもp音(バ行)がf音(フア行)となり、f音がh音(ハ行)となつたといふとがわかつたが、このh音が更にw音(ワ行)となり、そのwが遂に落ちるゝがあるといふことを知らねばならぬ。これを吞み込んだら、語源を研究するに至極便利である。左に其

其の外、れから類推して形容詞に *eka* が附いて、

taka pa *taka wa* *taka* *eka* (高い人)

といふやうなものも出来たのであらう。兎に角 *eka* といへば *ekitchu*

(高い人) といふよりも意味が善くない。これから類推して *ekai* (低

い人) と云ふ形も出来たのであらう。それから類推して色々の意味の言

葉が出来た。たとへば *witchu* といふ時は酔ふた人といふとである

が、*witchu* といふ時は酒呑 (酔狂) といふとになり *witcha* とい

ふ時にはよつばらひといふことになる。かういふやうに長い間の習慣によ

つて琉球人の言語感情では語尾の長い名詞は *びぐ* と卑いものを聯想する

が故に、人の姓を呼ぶに當つても自然と一種の約束が出来てゐる。田中

を *tanaka* といふと呼び棄てになる。そこで昔と (平民は勿論) 所謂

島持 (采邑の地頭) である人は自分の姓の語尾の母音を長く引張つて名

乗つたものである。これは實に奇なる現象ではあるが、その理由や源因は右の説明で能くわかるのである。

これらの事實を合せて考へると、日本語に於ける波行の古音が唇音であつたとは最早疑ふ餘地が無い。唯その唇音の如何なる種類であつたかは研究すべき問題であるが、これに就いて参考となるべきは琉球群島に於て今でも各時代を代表すべき唇音のあるとである。兎に角最古の音は *p* であつて、次に *f* *w* となり、最後に今日の *h* に變つたと見るのが適當であらう。(明治四十年八月)

古 琉 球

たうがね (宮古島の歌)

青潮の上から船やべらし、廻りまい。苦つふア無ん、汝等が門來せ
汝待つ剎那のご極苦れかり。
(べらしは行る。ミアりまいは廻るのもの。苦つふア無んは苦し、くは無い)

一例を挙げて見よう。

琉球語には英語で動詞の語尾にsを付けて、「何々スル人(者)」の如き名詞を作る如く、動詞の下略法にaを付けて「何々スル人(者)」の如き

考

名詞を作る獨特の方法がある。たとへば *hōchin* (打つ) といふ動詞の

音

下略法 *hōchin* に a を付けて *hōchin-a* (打ッ人) を作るが如く、如何なる動詞もこの下略法にaを付ける時は、忽ちにして何々、

P

人といふ名詞になる。これ少しく研究すべき所である。この外琉球語に於ては母音を長くする所には、大方重要な意味があるといふも知らな

ければならぬ。たとへば *ika* (行かむ) といふ動詞の母音aを長くして *ika-a* と

なるとなる時、行かむといふことになる。この *ika* は即ち *ikawa* のa

が落ちて *ika* となつたものである。私はこれから思ひついて、このaとaの間

究した。そしてこの *ika* はアイヌ語の *ika* と等しく、

者又は物といふ意味を有するものであると確信して、

言を調査して *ika* が a となつた痕跡を求めたら、

に於て之を見出した。奄美大島の方言では連体法又は連用法に *ika* (doe)

は獨逸語の *o* ムラウト) 付けて何々する人といふ名詞を作る。即ち、

nehi *doe* 沖繩語の *neha* 即ち打つ人の意

in *kurushie* *doe* (沖繩語の *in* *kurusha* 即ち犬を殺す人の意)

mak *nehi* *bae* (牛の腹を打つ者の意)

古 琉 球

この *doe* は人を叩いていふ言葉であつて、

者又は奴の意があるとのと

である。(これは田舎ッペー、などのべと

と沖繩語の *ucha* ととも *uchupa* であつて、

uchurwa となり、遂に今日見るやうな形になつたのであらう。

其の外りれから類推して形容詞に *tu* が附いて、

taka tu *taka wa* *takaa* *taka* (高い人)

といふやうなものも出来たのであらう、兎に角 *takatu* といへば *takatu*

考 (高い人) といふよりも意味が善くない。これから類推して *tu* (低

い人) と云ふ形も出来たのであらう。それから類推して色々の意味の言

葉が出来た。 たごへば *tu* といふ時は酔ふた人といふものである

音 *tu* *tu* といふ時は酒呑 (酔狂) といふことになり *tu* とい

ふ時にはよつばら、ひとふになる。かういふやうに長い間の習慣によ

つて琉球人の言語感情では語尾の長い名詞はほぐと卑いものを聯想する

が故に、人の姓を呼ぶに當つても自然と一種の約束が出来てゐる。田中

を *tanaka* といふと呼び棄てになる。 りこで昔と (平民は勿論) 所謂

島持 (采邑の地頭) でかい人は自分の姓の語尾の母音を長く引張つて名

乗つたものである。これは實に奇なる現象ではあるが、その理由や源因は右の説明で能くわかるのである。

古 琉 球

これらの事實を合せて考へると、日本語に於ける波行の古音が唇音であつたとは最早疑ふ餘地が無い。唯その唇音の如何なる種類であつたかは研究すべき問題であるが、これに就いて参考となるべきは琉球群島に於て今でも各時代を代表すべき唇音のあることである。兎に角最古の音は *p* であつて、次に *fw* となり、最後に今日の *h* に變つたと見るのが適當であらう。(明治四十年八月)

たうがね (宮古島の歌)

青潮の上から船やべらし、廻りまい。苦つふア無ん、汝等が門來せ
汝待つ利那のご極苦れかり。
(べらしは行るのまアりまいは廻るのものも苦つふア無んは苦しくは無い)

琉球の神話

何れの國の歴史も其序幕は神話によつて開かれてゐるが、琉球の歴史も矢張さうである。神話はもとより事實と同一視す可きものでは無いから歴史家に取つては左程價值ある資料ではないかも知れぬ、しかし或人種或民族の研究に指を染める人に取つては、これ亦必要なる資料の一たるを失はぬ。神話研究の聲が再び高まらうとする今日、大和民族と姉妹的關係を有する琉球民族の神話を紹介するのにも無益のとはなからう。

自國の文字を有せざる琉球は口碑の時代が比較的に永く續いた、否むしろ今日まで續いてゐるといつても差支はない。琉球の神話は遺老、説傳、や宮古、島、舊記に網羅されてゐるとはいふものゝ、まだ記録に収められ

てゐないのも澤山ある。左に琉球神話の代表的のものを五つ程紹介することにせう。

(一) 開闢の神話

古 中山世鑑によれば、昔天帝が阿摩美久といふ神を呼んで、「この下に神の住むべきところあれども未だ島とは成らぬやうなり爾行いて之を修理せよ」と命せられたので、阿摩美久詔のまに、下つて之を視察すると東海の浪は西海に打越し西海の浪は東海に打越してまだ島には成つてゐない。そこで一旦天に上つて土石草木を下して無數の島嶼を造つた。かくて數萬歳経つたが、人類はまだ居なかつた。阿摩美久再び天に上つて人の種を乞ふと、天帝は「爾が知る如く天に神多しといへども下すべき神なしさりとて黙止すべきにあらざ」といつて、一の男一女を下し給うた。この二人はまだ男女交媾の道は知らなかつたが、往來の風を縁し

て女神姪ミ三男二女を生んだ、長男は國君の初、次男は按司の初、三男は百姓の初、後女の君々の初、次女は祝々の初である。後國土保護の神々が交々現はれた。當時の民は穴居野處して菓實を食ひ、禽獸の血を飲み、まだ火食を知らなかつた。阿摩美久三たび天に上り五穀の種子を乞ひ麥粟禾を久高島に蒔き、稻苗を短念大川の後に玉城のオケミゾに植ゑ、その始めて出来たものを以て天地神祇を祭つた。しかし澆季の世になつてはこれらの保護神もだん／＼顯はれなくなり、従つて不幸といふものが始まつた中山世譜には

我國開闢之初海浪氾濫不足居處時有一男一女生于大荒男女志仁禮久女名阿摩彌姑運土石植草木用防海浪而嶽森始矣嶽森既成人物繁夥松當時之俗穴居野處與物相友無有价傷之心曆辛既久人民機智爲獻於時復有一人首分群類定民居者叫稱天帝子生三男二女云々

ごあつて國土を造つた神が一男一女になつてゐる。口碑には之は中山世鑑と同じくアーマンチュー一人になつてゐて、その國土を造つた時には天と地とが餘程接近してゐたが、或時彼が天の低いとを忘れてツツ立つた拍子に、その頭で天をつき上げたので、天と地とが今日のやうに隔離するに至つたといふやうになつてゐる。兎に角この神話には種々の異分子が混入してゐて、之をビュールファイすることは少しく困難であるが、幸にもこゝに、あ、り、き、ゑ、の、お、も、ろ、さ、う、し、があつて、この神話の簡單なる形を示してゐる。

むかしはじまりや、てだて、大ぬしや

美らや、照りよわれ

せのみ、始まりに

日、いちろくが

はあゝくはが
俯のしちへ
俯のしちへ
俯のしちへ

あまみきよははよせわぢへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

あまみきよははよせはちへ

日神 うらさかれて
あまみきよ 人間産すお
まねりや 人間産すな
然れば 人類産しよわれ
これは「むかしはちめからのふし」といふオモロで琉球の開闢を歌つたものである。「最初に日神降り、美しく照り輝けり、日神俯して下界を照給ふに、たゞよへる國ありければ、アマミキヨ、シチリキヨ二柱の神に詔して之を修理しめ給ふ、二柱の神詔のまに、下りて數知れぬ島々を造る、日神待詔ひ給ひ、その成るを述とし、更に詔して、そこには天人をつくらせして人類をつくれとの給ひき」との意である。さて琉球民族の精神的産物たるこの神話も亦海洋的分子を含んでゐて、古事記の開闢説にある瓊予の滴りによつて淤能基呂島が出来たといふ話に著しく似

てゐる。(拙著「琉球人種論」参照)

(二) 人文神話

琉球の神話

琉球には開闢の神話の外にアダム、イブの話に能く似た一種の人文神話がある。左に隣りのお婆さんから聞いた話を書き記して見よう。むかし古宇利島(運天港の入口にある小さい島)に男の子と女の子が現はれた。二人は裸體でゐたが、まだそれを愧ぢるといふ氣は起らなかつた。そして毎日天から落ちて来る餅を食つて無邪氣に暮してゐたが餅の食ひ残しを貯へるといふ分別が出るや否や、餅の供給が止まつたのである。そこで彼等の驚きと一通りでなく、天を仰いで

たうくまへさり、たうくまへ、(お月様、もし、お月様)
大餅やと餅お賜めしうれ、(大きい餅を、太い餅を下さいまし)
うまぐる、拾うて、たしやげやべら、(赤螺を拾うて上げませう)

古琉球

と歌つたが、その甲斐も無かつた。彼等はこれから労働の苦を嘗めなければならなかつた。そして朝な夕な磯打際にウマガルなどをあさつて玉の緒を繫いでゐたが、或時海馬の交尾するのを見て、男女交媾の道を知つた。二人は漸く裸體の愧ぢべきを悟りクバの葉で陰部を隠すやうになつた。今日の沖繩三十六島の住民はこの二人の子孫であるといふ。世にこれ程猶太神話に酷似した神話があるか。彼のアダム、イブが神の禁じた智慧の樹の實を食つ、目が明き、身の裸なるを覺つて無花果の葉を裳を造り、遂にエデンの花園を追出されて労働の苦を嘗めたといふ話をつくりである。この話は勿論神話として解釋すべきものではあるが、その中には琉球民族の哲學思想の萌芽がほの見えてゐると思ふ。一体社會の發展や人文の進歩は智慧の力である。もし古宇利島に天降つた男女に餅の食ひ残しを貯はへるといふ分別が出なかつたら、彼等は永久に自然と

いふ母の懐に這入つて無限に幸福であつた。相違ない。所がさういふ無意識的な幸福に満足してゐたら、人類は遂に禽獸の群を脱する事が出来なかつたであらう。その餅の食ひ残しを貯えへるといふ分別が出て以來、餅の供給が無くなつて、ウマグルをあさり廻つた所に味があると思ふ、かうし、勞働といふものが始まつた時に、人間界に人文の曙光がほの見えるのである。シルラーがアダム、イブの話を批評して、智慧の樹の實を食つてはならぬといふ神の聲を本能の聲と見たからは、神意に逆らふアダム、イブの不従順は人類が本能から分離するといふ事に外ならぬといつた言葉は借りて以て古宇利島の神話を批評する事が出来る。この所がやがて人文進歩の第一程である。本能的のパラダイスを失つた人類は道徳的のパラダイスを求むべく出發したのである。かういふ神話傳説は琉球民族の心理を研究する人にはこよなき資料ではあるまいか。

吾々の子供の時分には月夜の晩には、いつも天を仰いで、たふ、い、ま、入、り、を、詠つたものであるが、今日の琉球の子供はかういふ童謡を殆んど詠はなくなつた。思ふに二三十年前の子供の心理状態は自然といふ乳母に育まれた自然人のそれ、それをさるゝが遠くなかつたのであらう。吾々の子供の時分に詠つてゐた歌で、今日詠はれなくなつた歌は此外にもまだ澤山ある。

(三) 白鳥處女説話

琉球に白鳥處女説話のあるとは人の能く知つてゐる所である。これはかつて帝國文學や言語學雜誌で紹介されたことがあつて、外國の書物などにも見えてゐる。或農夫か井戸のほとりに時々明光のほの光を見たり、變つた髪の毛のあるのを見たりして、いつも不思議に思つてゐた所へ、或日花をふざむくやうな天女の浴みしてゐるのに出會つた。傍なる松が枝にかけてゐた羽衣を奪つてその飛行の道を断ち、たうく妻と成る。